

特 8

909

英雄物語

百物語之六

205135-000-3

特8-909

豪傑物語

谷口 流鶯 / 口演

M31

EDV-0143



緒言

家庭教育の必要なるは論なし故を以て輒近陸續  
の書の發刊を見る然れども多くは兒童の娛樂  
に供する翫弄的のものにあらざれば僅々數頁の  
一小傳記なり抑も家庭の書なるものは子弟のみ  
讀むべきものに限らずの父兄たる者亦常に之  
れを閲して雪の晨雨の夜一家團樂の際子弟と共  
に且つ語り且つ聽かば豈に樂しからずや然らば  
その資料たるべき書は長くも教育勸語に聖旨  
を奉体して忠君愛國の志氣を煥發し孝悌信義の  
心を涵養することを目的とせざるべからず家庭

の書なるもの決して苟もすべからざるなり然ら  
は翫弄的の書は固よりその資料を爲すに足らず  
数頁の小傳は乾燥無味にして讀者を感せしめず  
予窃に以て憾みとなす是に於て試に一人物の傳  
記中人々の龜鑑たるべき事項を抄出し聊かこれ  
を演義して趣味を加へ且讀者の厭倦を來さゞら  
ん爲め種々の事實を交錯變轉したり乞ふ江湖の  
諸彦字句の卑陋を尤めす編者の微意を恕して家  
庭資料の一に加へられを幸甚

編者識

豪傑物語

豪傑物語

講演百冊ノ六

○太田道灌

第一席

(鷹狩の村雨)

流鶯散史口演  
速記研究會々員筆記

只今の東京は昔し江戸と稱へましてその城は太田道灌の築い  
たものでございませう道灌の碑は先頃日暮里の道灌山に立ちま  
してその事蹟がそれに彫てございませうが道灌は初めの名を左  
衛門大夫持資と申し上杉宣政の重臣にて文武兼備の名將で  
ございました道灌がこの江戸城に居りました頃ある日鷹狩に出  
ましたとろこ一天俄かに掻き曇りザーザーと篠つく如き雨

豪傑物語

二  
が降つて來ました道灌四方見廻はしますと向ふに一軒の農家  
がございましたから供の者に向ひ「道」あれなる農家にて暫ら  
く雨宿りいたさう案内せい 供「ハッ承りました」と供の者はそ  
の家へ駆往き頼む「と訪ひますと容貞美はしき一人の乙女  
が出て参りました供の者は乙女に向ひ 供「御領主が鷹狩に出  
られこの俄雨にて難儀致さるゆゑ暫時雨宿を頼みたいどの  
仰せである 乙女「最と安き仰せではござりまするが只今主人が  
戻りませぬゆゑ何分お受けいたし兼ねます」と断りました男女  
七歳にして席を同ふせずとは古人の教へたとへ領主たりとも  
主人が留守にて女子一人の所へ男子は入れられんと言ふは尤  
の次第で女子の恨みが見えいかにも奥床しうござります道灌  
斯と聞きて乙女の姿をジツと見て 洞「主人の留守に宿はいた

豪傑物語

三  
さんと申すか乙女「ハイ」らば簀を借り受けたいといひま  
すとの女はサツと顔赤らめ何の答へもなくろの儘ツト起て奥  
へ入りましたすがやがて處々刺げた朱塗の盆を持出で庭の垣根  
に山吹の花が時得顔に咲て居ますのを一枝手折て盆に載せ悉  
しく道灌の前へ差し出しました道灌は不興氣に 道「予は簀を  
貸せと申したのであるぞ」と詰りましたけれども乙女は何とも  
應いたさず両手を支さ差し俯向て居りますから道灌重ねて  
道「簀を借せと申すのぢや花は所望いたさんぞ」と言つたが乙女  
は矢張り俯向た切り返事をいたしません流石の道灌も立腹い  
たし雨を冒して歸城いたしましたその折京都から客人が逗留  
して居ましたゆゑ道灌の客人に向ひ 道「今日鷹狩に出たる  
ところ俄か雨に逢ひ去る農家に立寄り簀を借らうと申し入れ

豪傑物語

たるにその家の乙女が山吹の花を出しましたが一向合点往かず何か譯けのあることとござらうかと尋ねましたすると客人は打領さ客それは古歌に七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しきといふがありませぬ護一つさへないどその身が貧しいことを詫びたのでござらうといひましたから道灌大に慙ぢ入り是れより一心不亂に歌道を勉強いたしましたたが精神一到何事か成らざらん幾程もなくその道に熟達いたしました道灌は乙女が古歌を應用して護のないことを詫びた才智に感激いたし是れより古歌を軍用に遣ひましたがその活用には誰れでも舌を巻かぬ者はございませぬ

第二席

さて太田道灌はその後主君宣政に従つて上總の麴南へ軍勢を

豪傑物語

繰り出しましたたが一方は群山高く聳え一方は海面に臨み道狭き處へ差し掛りましたすると先發の斥候が馳せ返つて斥候ッ御注進申し上げます宣何事ぢや斥候はこの先きの海邊の山に弩を仕掛け我が勢が通らば粉微塵になし呉れんと待ち構えて居りますと告げましたから宣政驚いて臣下の面々に向ひ宣敵がかく備をなす處をいかにして打通るべきや甲山の下を通れば敵は眼下に弩を射るゆゑ潮干ならば遠い干潟を押し通りたまへ乙イヤ斯る暗夜なれば潮干なりとも遠い干潟は通れますまい甲うれば何故乙兵暗ゆゑ途中にて潮の満ち來るのも知れず若し途中にて潮が満ちて來たなら一軍悉く溺れ死するでござらう甲潮の満干には一定の時刻がござる今は何時であらうか宣誰れか潮の満干を見て參れと云ふ

豪傑物語

と傍に控へて居ました道灌が「道」さらば某一見いたして参ら  
ん」とらり馬に跨つて驛地に驅出しました。が間もなく取つて  
返しましたから宣政は怪んで「宣」何か變事でもあつたか。道  
「イヤ別に變事もござりませんが潮は干て居ります。宣」十二潮  
が干て居ると申すか。道「左様にござります。宣」海邊まで行く  
間が無いが何うして夫れを知つたのぢや。道「さればござい  
ます」遠くなり近くなるみの濱千鳥なく音に潮のみち引を予知  
る」といふ古歌があります。只今千鳥の聲が沖の方にて遠く聞え  
ましたゆゑ潮の干たことを知りました。宣「さらば急に押し通  
れ」とありまして軍勢を進めましたところ果して道灌のいふ通  
り潮が干て居りましたから眞一文字に干瀉を押し通つたそこ  
で致の計畧は番餅に成つて仕舞ひました。が味方は危い處を無

豪傑物語

難に通りました。たゆゑ人々皆道灌の才智に感服いたしました。あ  
る時また利根川を渡らうといはしました。が黑白も分かぬ眞の  
暗夜です。から何處が深いか淺いか薩張り分りません。夫れに名  
にしむふ坂東一の大河でござります。から諸軍涉りかねて躊躇  
て居ります。と道灌馬を岸頭に進めました。人々皆必定水面を見  
渡すのであらうと思つて居ります。と道灌は水上には目も注げず  
耳を傾けて水聲を窺つて居ります。と上流に方りサツ／＼とい  
ふ漣の音が聞えました。すると道灌は直ぐ諸軍に下知して「道  
」彼の波の音の荒いところから渡れと云ひました。から人々驚い  
て互に顔を見合せて居ります。と部下の一人がその馬前に進み「軍  
師の御下知ではござります。が波の音の高い處は深い筈。然るに  
其處を渡れと仰つしやいます。は一向合点ゆきませぬ。道」イヤ

豪傑物語

左様でない古歌に「底ひなき淵やはさわく山川の浅き瀬にこそ  
あだ波はたて」とある波の音の荒いところは反つて浅いもので  
あるゆゑ其處を「涉れ」と云つて又もや無難に軍勢を涉しました  
そこで兵士は皆道灌の下知ならばよし水火の中へでも飛び込  
まうと勇み立ちましたナント歌も箇様に活用いたせば大層な  
ものではございませぬか

芭蕉

(月見の宴)

頃は八月の十五夜でありまして團圓な月が中空に懸り皎々  
澄み渡つてさながら晝のやうでございます或る片田舎にて一  
人の行脚らしい法師が餘念なくこの明月を詠め「ア、好い月だ  
何とも言へぬ景色だ」と稱めながら思はず月に浮かれて畦道を

豪傑物語

彷徨て居りますとある農で百姓達が  
子に里芋の湯煮の下物にいたし濁酒を酌んで月見の宴を開  
き俳諧を催ふして居りました彼の法師は垣根の隙から中の様  
子を窺ひますと坐中の一人が目早くこれを見付け「甲ヤア那  
處に和尚さまが覗いてござらッしやる」乙「檀那寺の和尚さま  
でねえか」甲「イヤ行脚の坊さまらしいぞ」乙「そんなら爰處へ  
呼んで對手にしたら何うだんべい」と一人が言ひ出しますと一  
同が「それやア面白かんべい」と忽ち賛成いたしましたして法師が辭  
退をするのを無理遣りに引き入れました法師は隅の方に少く  
成つて人々の咏み出すのを聞いて居ますと明月といふ題と見  
えまして明月や「くく」と頷りに迂鳴つて宛で明月の安賣が  
始まつたやうですすると中には「明月や團子のやうに圓さ哉」

豪傑物語

ぞといふ抱腹絶倒な句が出ます法師は可笑さを耐えて居りま  
すと李左衛門といふ撰者が法師の前へ来て 李今夜此席へ寄  
つた者は皆明月の句を出して坐興を催ふするだそこで和尚さ  
まも何か一ツ遣つて見さつしやいと勧めましたすると法師は  
頭を撫で 法われ等は御身たちの中に交つて興を添へるやう  
な者でござらん是れ計りは御赦し下さい 李イヤ〜それは  
成んねエ 句は佳かんべエが悪るかんべエが何んでも一句吐  
かつしやい吐かぬちう事アわんめい 是れでは一句も出ますま  
いけれども一同この道に熱心と見え左右からヤイ〜責め立  
てますから法師は詮方なく 法それでは仰せに従つて一句仕  
りませうそれへ書付て下さるといふと執筆は秃筆を執つて詠  
草に向ひましたすると法師は三日月の上の句を詠みました

豪傑物語

らか太郎作が「明月に三日月ちう事はあんめい別らんでねエか  
といふと甚左衛門が「俳諧なんぞ知んねエだ馬鹿な坊んさまだ  
と罵つたすると又一人が「左う言ふもんでねエこれが面白いの  
だ 甚ワハ、〜 那んで面白いもんか坊さまア苦しみだん  
へエ 太「左うだんべゑ氣の毒なこんだ」と法師の前後に立寄り  
散々嘲り笑ひましたけれども法師は彼等の言葉に耳にも掛け  
ず徐かに「頃より待ちし今宵かな」と跡を續けました「三日月の頃  
より待ちし今宵かな」いかにも名吟でございますから人々アツ  
と言つて感心いたしました前後左右に坐を正し平蜘蛛の如く成つて  
低頭平身いたしましたそこで李左衛門が法師の前へ両手を支  
き 李「那んちう旨いこと吐かつしやるだ尋常の坊さまであん  
めい今皆の衆が左う知んねエで笑つたは悪い勘辨さつしやい



と詫びました法師は莞爾笑ひ 法「イヤ左やう言はれては反つて  
迷或いたす實はわれ等も俳諧修行の爲め斯様に行脚いたすの  
でござるが各方もこの道がお好きと見え優しくも蘆を開かる  
ゝといふは如何にも感心仕る 李「そんなに稱めんが好いだ褒  
められると面目ねエ 太「俳諧の修行者だつてそんなら早く爾  
う言つて呉れゝば好いだ 甚「一体坊さまは何らう名前か聞か  
せて下さつしやい 法「俳名でござるか 甚「その法名だ 法「ま  
だ法名は付けませんが俳名ならば芭蕉と申します」といふと一  
同「ヒヤ」と云つて吃驚いたす將基倒しに轉覆つたその管當時  
俳諧を以て天下に名を轟かし芭蕉と聞たのでございますか  
ら甚左衛門はウンと言つて氣絶をする太郎作は「ぶつ魂消たこん  
だ」腰を抜すイヤハヤその亂痴氣騒ぎは何とも噓へやうがご

ございませんマツ今日ならボンナ昔しですから鳥羽繪の標本で  
ございます芭蕉も今更氣の毒に相成り手持ち不沙汰で居りま  
すとやがて一同は我に返り頭を疊に擦り付けて今までの無禮  
を詫ひ更に蘆席を開いて手厚く待遇たと申しますすが該に能あ  
る處は爪を隠すといふは即ち芭蕉の事でございませう

○織田信長

(桶峽の夜討)

織田信長は幼名を吉法師と申し備後守信秀の二男にて内大臣  
平重盛の後裔でございます幼き時より武藝を好み兒童を集め  
て戦争の真似をいたしました十六歳の時父信秀が没しました  
ゆゑ益す武事を練習して隣國の備へを嚴しくいたしました此  
に駿河國に今川義元といふ豪傑がございまして遠江三河の郡

豪傑物語

十四  
邑を掠略して威聲を遠近に振ひ尚ほ信長の領地たる尾張をも  
取らうとして三河の徳川家康を味方となし總軍四万を率ゐて  
攻め來つたすると鷺津丸根の二城が敵の押寄せる道に當りま  
すゆゑ守將大學貞宗は急使を信長の許に遣はして「義元は昨日  
沓懸に至り今夜兵糧を大高に運び兩城に攻め寄せん勢ひでこ  
ざる」と告げました信長はそこで將士を召してそれに向ひ「信  
長」の勢が鷺津丸根の兩城に押寄るといふ事であるわれ自身  
に往つて援けやうと思ふが如何ぢや」と問ひますと老臣林通勝  
が進み出で「通」恐れながら夫れは危道と存じます敵は四万に  
余る大勢にて味方は僅か三千に足らず寡は固より衆に敵せず  
されば一時の鋭氣を避けて本城を固く守りたまへ」と諫めな  
信長聞き入れず「信」それは不可われ天下の英雄を見るに一

豪傑物語

十五  
に地の利を待たふして時機を失ひ滅亡する者少なからず先君も  
隣國の敵が攻め來つた時は速かに出て戦へど仰せられたわれ  
先君の教えに従ひ明日一戦して勝負を決する覚悟である」と言  
ひ放つて決心の色面にあらはれましたから最う誰れも諫める  
者がありませんそこで信長は酒宴を催ふし猿樂に羅生門の曲  
舞をまはさせましたすると敵が既に攻めて來たといふ注進が  
あつたけれども信長少しも騒がず人間五十年夢幻の如しとい  
ふ處を繰り返し繰り返し諷ひ忽ち螺を吹き立てさせ手早く兇  
を被つてヒラリ馬に打跨り主從僅に六騎歩卒二百人許り露地  
に駆け出しましたか熱田の宮に參詣して願文神殿に納れて勝  
軍を斬る中に軍兵追つき來て千人許りと相成りましたるこ  
ぞ々の味方に使を遣りその兵を引具し揉みに揉んで押して來

豪傑物語

ましたが源太夫の祠から東の方を見ておれば早や鷺津丸根の二城は攻め落されたと相見を煙々と黒烟が立昇るその物凄さ何とも言へません林通勝柴田勝家池田信輝毛利秀高等の面々信長の馬前に立塞がり異口同音に斯る寡兵を以て勝ち誇つたる大敵に向へば見るく塵に相成らんと諫めた信長大音聲に信その方達よくわが言ふことを聞け我が謀は今川の大軍悉く本道へ繰り出し旗本小勢なる所へ山陰より切てかゝり一戦に勝負を決するのであると呼はりましたから士卒皆勇み立つた信長そこで旗をしぼらせ山陰から桶狭へ打つて向ひました義元は先陣が打勝たを悦び酒宴を催して居りますと一天俄に掻き曇りガラ／＼と雷鳴烈しく雨はザツ／＼と篠を衝くが如く信長の兵が寄せて来る物音分りません信長は義元の

豪傑物語

陣を覗ひ細代の輿のあるのを見て敵の旗本は彼處に相違なしといふより早く馬から飛び下りて斬込まうとしたと森可成がこれを押止め可味方は小勢にて敵は大勢ゆる槍先に突き崩したまへ信マ左様だ歸にかけ突き崩し呉れんと思上に二次の槍を揮ひ義元の旗本目薙けて真々に突き掛つた義元の兵は不意を喰つてソラ夜討だと狼狽て兜を倒さに被るもあれば槍を反對に捻るもある信長の兵は得たりとドツと閃の聲を揚げ無二無三に斬込んだ水野清久が一番に首を取るを手始めとして當るを幸ひ縦横に突き殺し薙ぎ倒しましたが服部小平太は早くも義元の幔幕を掻潜つてヒタリ槍を義元に付けた義元は荒氣の大將ですからそれと見るよりヒナリ太刀を引抜いて丁々發矢と渡り合ひました小平太の隙を見てスバ

その味に斬付けた小平太はタコくくと踏跟どころを義元  
透さず打ち込まんとする一刹那毛利秀高が背後よりグサリ義  
元を一槍突きましたから流石の義元も遂う討死いたしました  
うここで秀高は義元の首を取つて大音聲に「毛利秀高大将の首を  
上げたりと呼はつたから戦河の軍は右往左往に散亂いたし討  
たる、者凡そ二千五百餘人屍は積んで山となり血は流れて川  
の如く老臣勇士も大抵討死いたしました信長は義元の首を馬  
前に掛け威風凛々として清洲の城に凱旋いたしました

○佐々木巖流

(燕返の秘術)

劍術の達人佐々木巖流と申せば誰れ知らぬ者もございません  
が巖流初め劍術の奥義を極めやうと思ひ尾州熱田の宮に参詣

して頼りに祈願を變らして居ますと何やら我が髪を掠つて  
飛ぶものがありますから顔を上げて見ますと二つの燕が社殿  
の上で戯れて或は上り或は下り人も無氣に遊び狂ふさまいか  
にも憎らしうございますから巖流腰に差して居た鉄扇を振り  
上げて飛で来る燕子を一打に打落さうと待拵へて居ますと燕  
子は矢の如く鉄扇の前まで飛んで来ましたからヤツと聲かけ  
て鉄扇を打下すと燕子は早くもクルリ身を替して尻を叩き一  
昨日お出と言はぬ計りに藪の道へ飛んで往たコハ仕損じたり  
と再び身を拵へまた飛んで来る燕子を打うとして居りますと  
燕子は少しも鉄扇を恐れませんでしたクルリく身を轉じて心  
のまゝに飛び狂ひます有様は宛で巖流を侮つてそんな事では  
修行が足らぬサア搏てるなら何處でもお打ちといふ風に見え

豪傑物語

ますから巖流いよく焦立つて鉄扇を無暗に振廻はし己れッ  
と言つて追ひかけた巖流が焦立てば焦立はど手元が狂つて當  
らず燕子は自由自在に飛び廻つて散々巖流を惱ました流石  
の巖流も今は屈して如何とも詮方なく手を組んで暫らく思案  
をして居ましたがフト心付いたが我れ少しの劍道を心得たの  
を誇り那の自在に飛び廻る燕子を打うとしたは我れながら不  
覺であつたこれは熱田の明神が我心を試さうとして斯く燕子  
を下し給ふたのであらう神意の遠き凡慮の及ぶ所にあらず我  
れ若しそれに答へずは武士たる道に背くものであると夫れか  
ら毎日明神へ参詣いたしましたたが燕子は毎日のやうに出て來  
てイヤ精が出るね一ツ稽古をして上げやうかと人間なら言ふ  
でせうが燕子は口が利かせせんけれどもアツそんな盤梅で巖

豪傑物語

流の側へ來て戯れました巖流屈せず例の鉄扇にて打試みまし  
たが一心の凝る所岩をも透すの壁への如く七日といふ日に成  
て美事に燕子を打落しましたから巖流大に喜び明神の神慮を  
謝し夫れより燕返しの秘術を悟つたと申すことでございます

○高山彦九郎

(大膽不敵の事)

高山彦九郎は名を正之と申す上野新田の人で有名な勤王家で  
ございますこの人は寛政三奇人の一人で風變りの人物でござ  
いましたけれども忠孝の志厚くいたして何處其處に忠臣孝子  
があるといへば何程遠くでも拘はす尋ねて行きましたですか  
ら足は中々健歩でありまして日本國中を駆廻りましたがその  
手荷物は何ぞ甲冑一領ほどの重量があつたと申します彦九郎

豪傑物語

は江戸にて江上關龍といふ輩、劍の達人と親しく交際をいたし  
ました。が或る時關龍と劍術の議論を始めた。すると關龍は彦九  
郎に向ひ「關汝は氣ばかりで勝うとして居るが氣ばかりでは  
眞の英雄に遇ふと勝てない」といひます。と彦九郎躍起となり  
彦「ナニ勝てるねどがあるものか」と一喝した。關龍冷笑ひ「關  
、ソ勝てるなら此の關龍を一ツ斬て見ろ」といふ。と彦九郎は面  
色朱の如く相成り「彦己れッ」といひさま太刀の柄に手を掛け  
た。關龍少しも騒がず鉄扇を用てビタリ。ろの鏝を押へ付けた。彦  
九郎は只だ「ト打と抜かうとしたが何うしても抜けない。關  
「サア斬らんか。彦己れム、ム、ム」と何程いさんでも一寸も抜け  
ません。關「それ見る最う止せ、止せ」といふに、アハ、ハ、ハ」と關  
龍は大口開て笑ひました。流石の彦九郎も透う屈伏いたしまし

豪傑物語

て是れより日夜熱心に劍法を學びました。彦九郎は十三歳の時  
大平記を讀んで楠新田その他の諸將が志を達せずして滅亡した  
ことを見て大に憤激いたし是れより天朝の衰へたるを興さう  
といふ大望を懷きました。度々京都へ登りました。がその都度先  
づ三條橋の上より遙かに皇居を望み地上に坐して両手を支さ  
彦「草莽の臣高山彦九郎にござります」と云まして拜伏した。往  
來の人はこれを見て「甲「ヤア浪人がれ辭義をして居るせ何う  
したのだらう。乙「浪々の身で難澁するから何程か手の内を懸  
ひのだ。丙「ナニ左うちやアない立派な大小を差し居るしそれ  
に重さうな物を背負て居るから屑屋に捨て賣にしても一貫が  
ものはあるよ。丁「これア屹度親か兄弟がこの橋の上から身を  
投げて死んだのさそれで氣が懸に成つて泣き倒れて居るに違

豪傑物語

ひない」と種々に噂をして居ますと近所の小兒達が集つて来て「ヤア狂人が居らア狂人が可笑な侍の狂人だせ」侍の狂人ヤア「イ」とワイワイと騒し立てましたけれども彦九郎平氣で耳にもかげずやがて塵打ち拂つて優々と立ち去りました天明年間の事でございますが京都市に居ました夫れと聞いてヌワ一大事と韋駄天の如く京都を指して驕出しまたいかに彦九郎が足が早いと申したとして京都の火事を聞いて上野から驕付けたとて間には合ひません、けれども彦九郎はそんな事には頓着なく只だ禁裏に異變があつては一大事と狂氣の如く相成つて木曾の山中を夜の九ツ時只今の十二時頃疾風の如く飛んで來たすると爰處に網を張つて居た強盜が五六人バツと顛はれて行方に立塞り各々

豪傑物語

々刀を引抜て「甲」尋常に金銭でも衣類でも悉皆置て往け乙「四の五の吐すと素首打落すと威し付けた彦九郎臨と睨み「不屈者め上野の高山彦九郎を知らぬか」と破鏡の如き聲で叱り付けたすると賊共は喫驚仰天して「ヤア天狗だ天狗が出た」と皆刀を投棄て、一目散に逃出しましたこれは賊共が彦九郎の名を聞いて恐れたのではない彦九郎の眼光鋭くして鬚髯蓬々たる高山だと云ひましたから全く高山から天狗が出たと思つて怖れたのでございませうこの賊が後日捕縛されて獄屋に隠がれました時この事を物語つて今でもこれを思ひ出すと身の毛が悚立つやうだと言つたさうですが此頃の間は大抵世に天狗などといふものがあると信じて居りました今日でも教習のない者はまだ天狗や幽霊あぞがあるものと思つて居ますが

豪傑物語

實に嘆かばしい事でございます、さて彦九郎は勤王主義に凝り固まつて居ますから、ある日足利尊氏の墓に詣り散々うの罪状を敷へ立て己れ逆賊恐れ多くも一天万乗の君を惱まし奉るその罪入ッ裂きにしても飽き足ぬと罵つて持たる鞭を振擧げどシヤリ／＼その墓を打ちました、又ある士の家を訪づれましたところ机の上に室鳩巢といふ儒者が著はした書がありました彦九郎何心なく手に取て見ますと孔明は玄徳がその虚を三たひ尋ねて始めて出た然るに楠公は直ぐ召に應じて笠置の行在所へ往つたこれは孔明に比べると楠公は度量が足りないことであつた彦九郎忽ち烈火の如く相成り腐れ學者め何たる賤賤だ元弘の時と三國の世と同一に成るものか玄徳は敵の履を踏つて居た下賤のものだそれが帝室の末だなどといふとも虚か

豪傑物語

眞實か分るものか孔明が三顧されて出たのは早い位である楠公の如きはこれと譯が違ふ皇統連綿たる天皇陛下の臣民である、たゞいお召しがなくとも國家の安危を傍觀して居らるゝものか自身に出て忠節を盡さねば成らぬこんな書は見ると汚らはし／＼とビ／＼とその書を引裂いて庭へ擲き付けた彦九郎の舉動は箇様に狂氣染て居ますから俗人は誰れも相手にいたしませんけれども頼春水を始めその他の學者達には多く稱められて居ました彦九郎はその後筑後に遊歴して突然自殺して果てましたがその死んだ原因が分りませんで當時知人朋友は種々に評をいたし或は發狂したのだとも言ひ又は何か氣に障つた事があつて憤激して死んだのだとも言ひましたが一説には彦九郎皇室の御爲に幕府を倒さうと企てたことが露見し



うに成つたゆゑ夫れが爲め腹被割いて死んだのだと申します  
が或は左様かも知れませんが明治の御世に相成り朝廷にてはそ  
の勤王の志を御賞めに相成、從四位を贈られ高山神社の追号を  
賜はりました彦九郎は嘸ぞ地下で感泣したのでございませう

### ○西郷隆盛

(相撲の稽古)

西郷隆盛は舊と吉之助と申しましたが幼時より人並外れて眼  
目が巨大うございしましたからその父母がこれを眼大と呼び  
れゆゑ誰れも彼れも吉之助の名を呼ばずして眼大といひまし  
た後兩親を失つてからこの事を想ひ出して自分から眼大と稱  
へたさうです吉之助は壯年の頃國事に盡力する餘暇には相撲  
を取つて体力を養つたと申しますからその相撲の事に就ては

### 豪傑物語

### 豪傑物語

話しいたさせう吉之助が壯年の時江戸へ出ましたところ、西  
國にて相撲がありましたが東の方の大關は雲龍といひ西の方  
は不知火と申しましたこの不知火は薩摩の抱へ相撲でござい  
ますから吉之助は有村俊齋(今の海江田信義)と共に見物に往き  
ました吉之助は勿論不知火が最負でございませうやがて兩力  
士は土俵に上りましたがこの取組は當日第一の見物ですから  
傍目もふらず見て居ますと兩力士も此處を晴れと意氣込み双  
方シヨを踏鳴して構へましたが行司が扇を引くと立上つたす  
ると不知火は突然雲龍の頭を張つて素早く足を蹴た蹴られて  
雲龍浮足となつたところを不知火付入つてたゞ伏せ土俵の  
外へ投げ出したから見物一同「ッ」と喝采いたしました吉之助  
は不知火の勝利を見躍り上つて喜び直に相撲場を出て兩國の

豪傑物語

料理店に上り酒肴を命ト不知火を呼んでその手柄を譽めさて  
不知火に向ひ吉關取が今日の取組は思つたより目覺しく  
に面白かつたが何うしてそんな手を用ひたか教へて呉れとい  
ふと不知火は打笑ひ不知それはお安い御用でござりますが先  
刻の手は正しい相撲の道ではありませぬ今日の勝負は力づく  
では如何かと存じましたからそんな手を用ひて危く勝たので  
ござりますと謙つて答へたけれども吉之助は達てその手を教  
へると再三懇望いたしますゆる不知火は遂に先刻土俵にて取  
組に用ひた手を詳しく話しました酒宴了り吉之助は已が長家  
に販りましてから俊齋を捉へ吉これから不知火と雲龍の眞  
似をして見やう俺は不知火と成るから足下雲龍となれ俊  
「夫れから長屋の二階でアシン、パン、パン相撲を始めた雲龍の

豪傑物語

俊齋は身を固めア掛れと構へる處へ吉之助の不知火がエイ  
と組付き書問相撲場で見え通り頤を張り又た足を蹴たが俊齋  
の雲龍は少しも浮足にならない吉之助は怪しむ吉それでは不  
可い最些と足が浮かなくては……俊「アハハハ、お前の相撲  
はまるで壇の浦だ壇の浦とは當時下手の力士にて相撲通の間  
にては相撲の下手なものを壇の浦と呼びました足の先を蹴る  
から浮足になるがお前のやうに股の所を蹴たつて何で動くも  
のかと泰然として立つて居たそこで吉之助も成程左うじやと  
云つて又た二三度取り直す中に残らず不知火の手を覺えまし  
たから大喜びで寝たといひます當今の老力士陣藤久五郎並に  
その朋輩の荒馬といふ力士も島津家に入して吉之助の最負  
を受けましたその後慶應の頃陣幕が大阪へ出て土佐堀の薩摩

豪傑物語

屋敷に居ました時吉之助も小松帶刀大久保市藏吉井幸助等と共に國事を談合しある晩右の面々と共に陣幕を連れて或る朝烹店に行き小宴を催ふしました酒宴半ばなる時吉之助は陣幕に向ひ吉俺れが殿様ならぬ前を抱へず荒馬を抱へる荒馬は實に好い相撲だ」と頻りに荒馬を褒めまゝたから陣幕も返辭に困つて好い加減にあしらつて居ますとやがて陣幕を側近く招き寄せ吉「オイ關取手を出せ」といひましたから陣幕は何事だらうとグツと握拳を出した吉「それでは不可い廣げる」といひますから掌を開きますと吉之助は懐中を探り胸巻からグザグザ多くの黄金を取出し幕陣が掌の上に載せ吉「關取俺れは悪口を云つても無代は云はない夫れ纏頭を受取れ」と與へ吉「サア纏頭を遣たから異存はあるまい是から直ぐ稽古を仕やう

豪傑物語

と陣幕に掛つたが坐敷は狭し障子一重の隣には如何なる人が居るかも知れず若し誤つて障子でも蹴破れば大變だと陣幕は心配で堪りませんが吉之助は一向頓着なく徳利を蹴倒すやら皿小鉢踏碎くやら亂暴狼藉に及びましたが小松大久保の而々には面白がつて見物いたし愉快を極めて飯邸したといひます西郷は當時体量は二十八貫目あり相撲は三段目位取つたさうですが後陸軍大將でありました時聖上にもろの肥満のために中氣とならんこと宸慮あらせられ特別に大學病院の御雇御逸人ドクトルホフマンに命じその肥満を減じさせるやう療治をさせられました夫れが爲め体量三貫目を減つたといひます斯様に肥満して居ましたから馬に騎ることは甚だ不自由ですから西南戦争の折には常に勲節を用ひたと申します

# ○大村益次郎

(喧嘩の頭領)

九段の靖國神社の前に双眼鏡を執つて東北を睨んで居る銅像  
 がありませう彼れは長州の大村益次郎永敏でおさいます益次  
 郎は幼少の頃は強情で悪戯ばかりして學問が嫌でありました  
 から父は大に心配して知人に頼んで江戸へ修行に遣りました  
 益次郎は或る塾へ入りましたが學問などは其方除けにして誰  
 れでも相對を擇まず喧嘩をしましたから忽ち退塾を命せられ  
 ました夫れから何軒となく入塾いたしましたか曾四五日に  
 追ひ出されました宛で日吉丸その儘ですある日市中を彷徨し  
 て誰か好い喧嘩の相手はないかと捜して居ると忽ちワッ  
 といふ聲が聞えたするとバラバラと大勢が此方へ逃げて

## 豪傑物語

来て「嘩喧」〜「危険い」〜「ヤ」喧嘩だ」と人波を打つて騒ぎま  
 すから益次郎「占た」と大恐れにて無二無三に群がる人を押分け  
 突除けろの場へ往つて見ると破戸漢どもの仲間が集つて各自  
 得物〜を打振り喚き叫んで闘つて居る當時は喧嘩を江戸の  
 花の一ツに數へた位ゐですから實に凄まじい勢ひで打合つて  
 居ます益次郎腕を撫で、見物して居ましたか人数の寡い方は  
 逆も多勢に敵せんと思ひましたから小勢の方へ加はり指揮い  
 たしましたところ謀畧自在にして遂う敵手を負しましたそこ  
 で益次郎いよ〜得意と相成り喧嘩があるといふと何時でも  
 飛び出してその仲間に加はりましたか益次郎方は常に勝を制  
 しますゆゑその黨類は益次郎を頭領と仰ぎました益次郎を預  
 つて居ます某は大にこれを憂ひ益次郎に充分意見をいたしま

## 豪傑物語

豪傑物語

した素より愚かならぬ益次郎でございませうから忽ちその非を  
悟りこれより一心に學問に勉強いたし幾程もなく漢洋の學に  
通じ殊に兵學の奧義を極め兵を用ゐること神の如く古の名將  
も及ばぬ位でございませうした彼の上野東嶽山に楯籠つた彰義隊  
を一戦に奔らせ都下百万の人民をむて兵火の難を免れさせた  
は全く益次郎の軍配が宜しかつたからであります最初官軍が  
討手に向ひました時江戸城中の諸將は彰義隊の勢ひが猖獗で  
ありましたゆゑ勝敗如何かと心配して居ましたすると益次郎  
は懐中から時計を出してこれを諦視め益勝算既に定つて居  
るから案じることはない日暮には屹度勝報が来る」と云つて沈  
着て居たが果してゐるの通りでありましたから人々皆その智略  
に感服いたしました稗本鎌次郎等が函館に據りました時も益

豪傑物語

次郎追討の部署を定めましたがその平定に至りませう前西郷  
隆盛は大軍を率ゐて進發いたさうとした益次郎これを止めて  
益十日以内に賊軍は必ならず降参するから進發には及ぶまい  
と云つたけれども當時賊の勢が猖獗でありましたから隆盛は  
益次郎の言葉を信せずして進發いたしましたところ果して益  
次郎の言の如く途中にて官軍勝利の知らせがあつたそこで隆  
盛も感心して隆「俺は斯んなに眼は大きいが大村の眼力には  
迎も及ばぬ大村さへ居れば軍事は心配ない」と云つて一切兵事  
は益次郎に任せたとはいひますか惜いかな後年京都の旅館にて  
暴徒の對刃に罹り取へない最後を遂げました

○加藤清正

(辨士の膽を破る)

豪傑物語

豊臣太閤が國內を平定し餘勢大軍を起して朝鮮を征伐いたし  
ました時加藤清正は威鏡道に攻め入り向ふ所敵なく宛ながら  
無人の境を行くが如くでありましたソラ清正が来たといふと  
泣く見も黙然つたといふ事です然るに朝鮮に加勢をいたした  
る明國の大將宗應昌といふもの部下の諸將を集めて 宗「われ  
此度朝鮮を助けん爲り大軍を率ゐて馳向つたところ秀吉の將  
士達は皆逃げて王城に集つて居る然るに清正獨り強情にも威鏡  
に踏留つて居るが彼を如何して追ひ拂はう 甲「日本の將士中  
最も手剛いば清正である彼は力づくでは逆も叶はぬから計畧  
を以て走らすが宜しい 宗「それは何んな計畧であるか 甲「  
喝すのです 宗「喝すとは如何するのか 甲「辨士を遣つて張  
儀の如く説けるのです 宗「誰を遣らう 甲「辨士を遣つて張

豪傑物語

儀にも劣らぬ辨士でありますから彼こそ敵當の人物と思ひま  
す 宗「成程さらば辨士を遣ることに極めやうそこで評議が  
一決いたしましたから宗應昌は直に瀝仲櫻を召んでその旨を  
言ひ合ひ清正の許に遣はしました清正は明の使者が来たとい  
ふことゆゑ泰然敷皮の上に坐して仲櫻に面會いたしました  
清「明の使者といふ事であるが使命承まはらう 仲「使の趣き餘  
の義にも候はず今度日本國にては故もなく軍を發して朝鮮に  
攻め入りしゆゑわが明の皇帝大に怒りたまひ雲霞の如き大軍  
を發して朝鮮を救はせ已に平壤開城を始め國都をも取返し浮  
田秀家小西行長の輩を生擒り盡くろの兵を追拂ひ琉球羅の  
諸國に令して兵を日本の國境に向はせたり然るに御邊何時ま  
でもこの城を守つて居らるゝが抑も誰れの爲に守つて居らる

の御遊の爲を思ふに早く朝鮮の王子を返し日本に歸る  
宜しからう若し左なくば四十万の大軍を差向けて足下に見  
たさん使命斯の如にて候と激みなく説き立てた清正は虎  
を撫で清われは日本國の命を奉じて戦ふことは知つて居る  
が明の命を聽て和睦する事は知らん其方歸つて爾う言へ我方  
には物具兵卒は有つても近頃戦もなく徒然に困んで居る所だ  
軍勢を差向けるとは何寄の幸である何時でも遠慮なく差向け  
られよされ威鏡の道は險阻にて騎馬武者は並んで通ること  
能はず徒歩武者は隊列を成すこと能はず軍勢の寄せて來ること  
日に二二万にはよも過ぎまい吾迎へ撃つて日に一万づゝ殺  
したなら四十日にして殲きて仕舞ふ又日に二万づゝ殺したな  
ら二十日で殲する殲きて仕舞つたなら直ぐ貴國に攻め込んで

明の國王を生擒つて日本の家來とするその時こそ我が軍を還  
す時である」と凜然として言ひ放つた仲國のいふ事は虚喝であ  
るが清正の言葉は虚喝でない實際百萬の大軍も殺し殲さうと  
いふ勢でありますから仲國魂を潰してこれは逆も虚喝は利か  
ぬと呆々逃げ歸つて斯々と宗應昌に告げたすると應昌を始め  
明の諸將兵士に成つて戦へ上つたといひますがナンと氣味の  
好い事ではございませんか

○楠正成

(釣鐘堂の賭事)

楠正成が忠節にして智略あることは今更ら申す迄もございま  
せんが正成は幼少の時多聞丸と稱へ實に驚くべき才智があり  
ましたある年奈良の春日社に參詣して東大寺の中を殘る隈な

豪傑物語

く見廻しましたところ釣鐘堂の下に多くの出家が寄集つて  
甲「この釣鐘は日本第一の巨鐘で今日まで誰れも動かした者が  
ないけれども大勢で掛つたら動かだらう」乙「左うさ三十人  
で押したら少しは動かかう」丙「オオ工夫さへしたら一人にて  
日の中に動かせる」といふと一同此と笑ひ一同「フハ、フハ、  
馬鹿な事をいふ三十人の力でなくて動かぬものが何が一人  
の方で動くものか」丙「動かせるから動くといふので何も可笑  
いことはない」甲「何時もそんな高慢をされるがつひに未だそ  
の手際を見たことがない」丙「イヤそれは尤であるが所望もな  
いのに大事を軽ろくしく此方から明すものか不思議と思ふ  
なら明日にても一處に此處へ来て俺がいふ様にして此鐘を動  
かして見たまへ動いたら俺が所望する物を下され若し動か

豪傑物語

ければお望みに任せて何でも差上げやう」と威張つて居るす  
と又一人がこれを冷笑して「よく提灯と釣鐘程の違ひだといふ  
が提打なら動かせるだらうがこの釣鐘が動かせるものか」丙  
「だから動くか動かないか賭を仕よう」乙「屹度かい」丙「天地神  
明も照覽あれ決して偽は申さん」と遂う何か賭をいたして居ま  
した正成は最前より始終立聞して居ましたか供の者を振返り  
正「今ま釣鐘の動く動かないに就て賭をして居る容子だが那の  
一人で動くといふ者が勝つな俺は最うその方法を覺つたが那  
の者は賢い人物ぢや」と語りました供の者は不審に思ひました  
がその場はその儘にして宿所に歸り正成に向ひ「僕最前一  
にて鐘を動かせるやうに仰しやいましたかその仕方は如何  
たすのでございます」と問ひました正成は首肯きて「正、那



豪 傑 物 語

れか那れはいと易いことだ再び那處へ往つて試しに動かして  
見せようと正成は四五日経て供人どもを召連れ再び釣鐘の下  
に往き供の中で力の強い者を一人撰び出し高さ十二尺許の箱  
を取寄せて釣鐘の下に置きこれを踏台としてその上に登らせ  
正その方掌をこの鐘に當て、徐づに押せぬまり強く押して  
は不可ぬいづも同じやうにエイと云つては押しエイと云つて  
は押し決してその加減を違へては成らぬ又動かないからと云  
つて退屈しては不可ぞと教へた 供委細承知仕りましたと供  
の者は正成の吩咐通り己の刻から申の刻まで怠たらず押しま  
したか更にその効が見えませぬ 供中々動きさうにも致しま  
せぬ 正イヤ今少し押しして見る程度動き出すから供の者は去  
命ですから詮方なく又以前の如く徐々と押しして居ますと云

豪 傑 物 語

抑も如何に今まで頑として大磐石の如くでありました釣鐘の  
龍頭のところかギシク、鳴つて来たソリヤこそ動き出したと  
思つて居ると漸次ギイ、と音がして後にはさしもの巨  
鐘が一本の指で自由自在に動き出しましたから供の者は仰天  
して 甲「ヤア不思議」これは驚きました 乙「何うも若様素  
晴しいお考へでございます 丙「中々凡人の及ぶどころでござ  
いませぬ」と稱めそやしました三十人許の力でなければ動か  
ない巨釣鐘を一人の力で動かすは實に容易なことでないけれど  
もその力を積んで怠らなければその成功は斯様でございます  
雨滴の水が石へ穴を穿けますもこれと同トくろの力を積んで  
怠たらぬからでございます

○大石内藏之助 (喜劍の侮辱)

豪 傑 物 語

大石内藏之助は本名を良雄と申し播磨の國赤穂の藩士でござ  
います元禄中藩主淺野長矩は江戸の城中に於て吉良義英に辱  
しめられたを怒り刀を抜いて之れを傷けましたゆゑの罪に  
て切腹を申し付けられ城地を召し上げられましたこの事は人  
口に膾炙して誰れでもよく知つて居られませうから暇々しく  
申しあげませんさて良雄は深くこれを遺憾に思ひ誓つて亡君  
の仇を報せんものと同志の者を談らひ自分は京都に登つて時  
機を待つて居りましたすると世間では良雄が仇を討つに遊ひ  
ないで頻りに評判をいたしました夫れゆる吉良家ではますま  
す用心が殿直でございます良雄は世間の評判を打消して吉良

豪 傑 物 語

家の用心を疑めやうと思ひ故と酒宴遊興に耽り散々白痴た眞  
似をして居ましたうことで世の人はこの有様を見て良雄は放蕩  
に身を崩して最う復讐なぞする量見はない見下け果た人物だ  
と噂をいたしましたある日又例の如く島原の茶屋に遊んで  
居りますと薩摩の士で喜劍といふ者が義侠心から密かに良雄  
を助けて仇を討たせたいと思つて居ましたけれども良雄とは  
一度も面識がありません然るに良雄が仇を討たうといふ方角  
もなく遊蕩に日を送つて居ると聞き心中面白からず先づ一應  
彼に面會してその意中を探らうと存し良雄が往き付けの茶屋  
に上り下婢を招いて 喜内藏之助殿は今日も來て居らるか  
な下婢へエ那の表座敷で諷いで入つしやるのが内藏さまで  
ござります 喜よ、然らば内藏之助殿の方へ參つて薩摩の士で



ありながら復讐をすることも知らず遊興三昧に日を送るとは  
何事だ犬猫同様な奴だから犬猫同様に取り扱つて呉れやうと  
左の脚の甲に指身を載せ「サア食へ」と突出した、すると良雄は喜  
劍の顔を「ッ」見えてやがて犬か猫のやうに俯向きに成り口に  
て食つて仕舞ひ舌打ちをなし足の甲に付て居た汁まで「ッ」  
く残りず越めて仕舞ひましたから流石の喜劍も呆れ果て  
喜畜生汚らばし「ッ」いひ窮て席を蹴立て、去りました良雄は  
斯る無禮をも克く耐へましてその後江戸に下り同志の者四十  
七人吉良家へ討入り義英を殺して遂う本望を遂げました然る  
に喜劍は一朝の怒りに良雄を散々辱しめましたが良雄が愈よ  
亡君の仇を復したと聞いて大に心に愧ぢ良雄が死んだ後ちそ  
の墓前に詣つて暈の罪を詫び腹掻割いて死んだと申します

○有村治左衛門

(辻斬の失敗)

只今烈士喜劍の事をお話し申しましたが薩摩には義侠の人物  
が多く出ました彼の水戸の浪士を助けて井伊大老を櫻田門外  
に刺した有村治左衛門も薩摩の人でありましたが元來驍勇に  
て力量人に勝れ居合の術に委しく且つ劍法をも修め江戸に居  
りました時は麻布の十番に道場を開いた程でございませすその  
頃各藩血氣の輩は市政の衰へたるに乗じ腕試しとか又は新刀  
を試すとか申して辻斬に出る者が多くありました怪しからん  
事です然し當時はこの辻斬が大に流行いたしましたゆゑ有村  
治左衛門も平生武勇自慢でありましたから他人が辻斬をした  
話を聞いて羨しく思ひ殊に自分は居合の術にも長じて居ます

豪傑物語

から何で餘人に劣るものかと或る夜九段坂の上の人通り淋しい處に往つて人が來れば好いと待つて居たすると向ふから血氣盛ん武士が仲間の寄合か何かと見え一升徳利を提げ腰に一刀を帶し威張り返つて來た治左衛門これを見て此奴面が憎いから斬て遣らうと近寄るが否や手練の居合にて拔打に拂ふとガナリ音がして一升徳利が二つに割れ酒がチャアと地上へ流れたするとその武士は己れ無禮者ツと刀でも抜かと思ひの外一散に雲を躰と逃げて仕舞つた治左衛門は仕損じましたから一升徳利の割れたのを見てハ、ハ、ハ、徳利の辻斬とは情けない哩い今度は骨のある奴でも來れば宜いと物蔭に潜んで待つて居ますと年の頃五十余の老人らしい士が腰に一刀を帶し小聲にて謡曲を詠いながら悠然として歩いて來るところは

豪傑物語

何う見ても一癖ありさうな人物と見えた此奴こそ手應へがあらうと後ろからソツと歩き寄りヤと聲かけて拔打にする何の手應もないヤ失策だと驚く途端老人は早くもその利腕を繰つて苦もなくその場へ捻ぢ伏せた治左衛門大に驚き跳ね返さうとしたが急所を押へられて動くことが出來ずアハヤ今度逆さに自分が首を落されるかと觀念をして居ますと上になつた老人は呵々ど笑ひ老ハ、ハ、ハ、貴様は中々居合が上手だなその代り劍術は餘程下手だ拔打に斬りかけた一刀は少し許り牙へて居たが跡は丸でアクのボウだそんな腕前で人が斬れるものか第一罪もない人を辻斬にして樂むと云ふのが不心得千万だ爾ういふ事は劍術が下手だから始まるのだ劍術が上手になつて劍道の奥義は身を護るもの決して他人を斬るべから

豪傑物語

ものでないと分れば辻斬のやうな馬鹿な事は出来んもしも巳に首を斬られたら何うする何の命を以て殿様へ御奉公申上げる察するところ貴様は薩摩の藩士だらう薩摩人が大分辻斬をいたすと云ふ評判だ怪しからん事だ貴様の命は助けて遣るか  
ら仲間の者に爾う言つて以來は必らず辻斬を止めさせるも  
も再び辻斬に出ると此の俺が出かけて来て一々首をチョン切  
つて行くぞと殿しく訓戒を加へました治左衛門一々心魂に徹  
し總身より汗を流しましたが唯だ薩摩藩士と云はれたことが  
心苦しく斯る場合に藩の名を出さば君公の御耻辱にもなる  
思ひ、治イヤ己は薩摩藩士ではない決して薩摩藩士でない藩  
士でないから仲間の者に云ふ事も出来ん斬るとも突くとも勝  
手にしろと粗敷れても閉口しません老人も心憎く思ひ、老

豪傑物語

強情を云ふなら一つ責めて遣る是れでもか」と柔術  
の手にて急所を締め上げられたから治左衛門は總身揺けるか  
と思ふ計りの苦み、けれども愈よ強情を云ひ張つて死ぬとも白  
状すまいと決心いたしましたゆゑ老人も遂う責めあぐみ老  
「中々強情な奴だその強情が願もしい助けて遣るぞ」とその儘立  
上り再び小話を講つて悠々と歩いて往きました治左衛門は起  
き上つてゐるの体に感心いたし如何なる人かと密かにその跡を  
跟けて往きますと老人は當時飯田町に道場を開いて居て江戸  
の四天王と言はれ無念流の劍客齋藤彌九郎でありましたそこ  
で治左衛門大にその妙技に感服いたし後にその門弟と相成り  
必死に劍法を學びましたから遂う屈手の達人となつて道場を  
も開くに至りました

○谷文晁

(白拍子の實寫)

豪傑物語

谷文晁は名高い畫工でございます或る時高祖頭巾を面深に  
 被り黒羽二重の小袖の下に白無垢を着したる美人が一人の下  
 僕を拉れて案内を乞ひましたゆゑ取次の下婢が出て用向を聞  
 きますと先生に繪を一ツ描て戴きたいと云ひますから下婢は  
 直ぐその由を文晁に告げました文晁は早速一ト間へ通して面  
 會いたしますと美人はやがて頭巾を脱ぎましたが斯は如何に  
 美しくしい尼御前でありました尼は感歎に挨拶をいたし尼先  
 生の御高名を承り繪を一枚描いて戴きたく存してふしつけ乍  
 ら伺ひました文ハ、ア左様でございまするかシラ何んな繪を御所  
 望でございますいますか 尼白拍子の舞のところを願ひます 文成

豪傑物語

る程それでは彼の名高い御前が鎌倉の入船で舞ふ所ござ  
 いませうナ 尼イエ左様なものでございません妾は白拍子  
 の舞が好きでよく舞ひましたが妾が舞ふところをお描き下さ  
 りといひますと最前より襖の隙から覗いて居ました同家の人  
 々は 男「あれは狂氣だらう 女「左うですれ可哀想に自分の夫  
 に死に別れて尼となつたのですが夫が戀しい〜で途う氣が  
 違つたのですよ 男「程左うかも知れないダカラ御前が上  
 すや〜と謡つて義經を慕つたやうなところを描いて呉れる  
 といふのだらうなぞと種々に噂さをして居ります文晁も可憐  
 さを耐へて 文「貴女の舞ひをまだ拜見いたしませんから一は  
 し舞つて下さいませんか」といふと尼は眞面目にて 尼「年久  
 く舞ひませんゆゑ御覽に入れる程のことはありませぬと舞は

豪 傑 物 語

なければ留みが叶はぬといふことなら一とさし舞ひませうけ  
れども坊主頭の丸いのも可笑しうございます」といひつゝ手拭  
にて頭を包みました。蔭で見てる人達は「いよゝゝ」キ印に相違  
ない「ッラ猫ぢや〜」が始まりますよ」とクス〜笑つて居る尼  
は少しも頓着なく文晁に向ひ「尼何うか扇子を一本お貸し下  
さう」と云つて床の間の正面に居直りました。文晁は何うするか  
と思ひ新しい扇子を興へました。尼はこれを開ても見ず右の脇  
に置き衣紋かひ繕ひやがて話ひ出しました。がその聲といひ節  
といひ微妙なることは何とも申されませんでした。から文晁を始め  
で見てる人々も耳を済まして聴て居ますとツト話につれて  
立上り「をッ」と開くと見事に残らず開きました。誰れが開て  
も如きは開くまいこれ計りでも見物だと散々悪く言つた者が

豪 傑 物 語

忽ち稱めだした。尼は扇を覆へし翻翻として舞ふさまは宛なが  
ら胡蝶の花に戯むるゝが如く手振といひ品といひ天女の下界  
へ舞ひ下つたかと思はれ彼の鎌倉八幡で多くの見物人を感動  
させた。静の舞ひもよもこれには及ぶまいと人々感心いたしま  
した。さて舞も畢りました。ゆるゑ文晁直に筆を執つてその舞ふ様  
を描きました。が現在實物を見て精神込めて描いたのでありま  
す。から繪が活きて居るやうで今にも紙面から抜けだして舞ふ  
かと思はれました。文「私も是れ迄静の舞を幾枚もかきました  
がこれ程には出来上りませんで。たこれは全く貴女の舞ひが  
私の心を感化したからであります。尼何うも見事に出来まし  
て有難う存じます」と厚く禮を述べて白銀一ト包みを差出し  
ました。文「お名前は何と仰しやいますか。尼「名前を申し上げ



る程の者でございませんと謙遜して立去つたと申しますが人は漫りに罵りますと跡で赤面することがございます西洋の誌に口と財布は閉ぢるが徳だと申しますが成程左様でございませう

### ○力士小柳

(米人の三人掛り)

安政年間亞米利加合衆國の使節ペルリといふが軍艦に乗つて相摸の浦賀に来て交易をしたいと申し入れましたその時我が國からは種々の物品と米百石を使節に贈ることにいたしました然るゝ外國人は皆体格が好いところへ米の一俵やそこら僅と擔ぐやうな通常の人足に持たせて遣つては日本人は那んなに力がなく弱いかと思はれますく外國人の侮りを招くゆゑ

これは大兵肥滿の力士に持たせて遣つたが宜からうといふので愈よ力士に盼附て運ばせることに決定しました米は何れも五斗俵ですから通常の人が力一杯出して漸う持ち上げられるものですけれどもそこが力士でございますから之れをヒヨイヒヨイ手玉に使つて持ち運びましたが如何にも目醒しうございしました就中小柳と白真弓の二人は力量抜群にて各々六俵を背中に負ひ一俵を頭に戴き一俵を掌の上にてクルクル踊らせ乍ら運んで居ましたから米國人は恐ろしい力だと吃驚いたしましたけれども多勢にはよもや叶ふまいと思ひまして同艦の乗込水夫の中で剛の者三人を擇び出し我が役人に向ひ米那の米俵を六個背負つてその上頭に一俵載せ掌に一俵を持上げて居る者は何と申す人でござるか 役彼の者は小柳と申す力士で

豪傑物語

ござる 米天晴な力量でござるな既ては當艦に剛力な水夫が  
三名ござるがその小柳とやらと取組まして見たいものです如  
何でござらう 役成程夫れは面白うございませう委細承知い  
たしましたそこで双方取組ことに成つて支度に掛りました彼  
方ではペルリを始め一同本國の者に勝せたいと片唾を呑んで  
見物して居ります此方は浦賀の役人達も小柳にひけを取らず  
まいと手に汗を握つて見詰めて居ります互に何方が強いが弱  
いか兩國人の力量を試みす分け目の勝負でございますからシ  
ンとして水を打つたやうに静まり交したやがて小柳はジン  
／＼と踏鳴して 小「サアを座れッ」と身構へをすると米國人  
は相撲の手も何も知りませんで無難作にドツと三人一度に組  
付た小柳は充分に組ませて身動きもしません三人はエイ／＼

豪傑物語

押せども曳けどもヒクヒクもせず宛ながら地上に大木が生へた  
やうであります三人は全身に汗を流し漸々呼吸が急はしく成  
つてハツハツと息をして居る小柳はよき程に疲らせて置きや  
がて左の手を差し延べて脇なる一人の頸筋引攪んで脇の下に  
掻込みグツと抱き締めたからその者は脇も裂ける計の苦みに  
て目を白黒させて居ると小柳は又右足を揚げて前の一人  
を蹴倒して足下に踏へエイと聲かけて残る一人を目の上より  
高く差し上げまた掛る者があるなら何人でも掛れといふ勢を  
見せましたから彼方も此方も一同に掌を拍つてドツと稱めま  
したかその聲は天地も崩るゝかと驚はれました流石の米國人  
も感心して通辨に向ひ 米世には恐ろしい強力な者もあるも  
のですな那の小柳とかいふ人物は何うしてそんな力があるの

です。問ひました通辨は大得意にて日本の良い土地に生れて  
るの土地に出来る良い米を食ひその米から製した良い酒を飲  
むゆゑ力が強く成るのです。と答へましたそこで米國人はいよ  
く鼻柱を挫かれて一言もなかつた。と申します。が今日なら  
日通辨氣焔万丈とでも稱めるのでありませう。

### ○塚原ト傳

(無手勝流)

塚原ト傳は常陸塚原の人にて世に名高き劍術の達人でござい  
ます。ある時京都から故郷へ飯らうとして近江の國を過ぎ小舟  
に乗つて琵琶湖を渡りました。すると乗合の中に年の比三十七  
入とも思はれる士が肩臂怒らせて「某數年劍道を學び或る時は  
深山に分け入つて天狗共を相手としてこれをタ、キ伏せ或る

### 豪傑物語

### 豪傑物語

財は有名な擊劍家の道場に行き師といはず弟子といはず片端  
から打倒し遂に鞍馬山に登つて大僧正より劍道の奥義を授か  
つた天下廣しといへども恐らく我に敵するものはあるまい。誰  
れでも望みどあれば相手にして遣らう」と四方憚からず高言し  
た乗合の者は皆心の中で那れが所謂天狗だ自慢高慢馬鹿の中  
といふから相手にせよ。と誰れも取合はない。彼の士は張  
合が抜け誰れか敵手が欲し。と船中を見廻して居ました  
ト傳はわざと聞かない振をして「コツ」居睡をして居ますと  
彼の士は横目に「ヨロリ」睨み付け「士貴様は二本の刀を帶しな  
がら此方に向つて一言の挨拶もせぬとは何事だ刀は伊達に帶  
して居るのか」と無禮極る一言、けれどもト傳怒れる色もなく  
ト拙者も幼少より劍術が好きでござるが人と試合をして勝つ

豪傑物語

といふのが大嫌いで唯だ負けぬやうにと夫ればかりが心願でござる」といふと士は大口開いて「士」ワハハハ、ワハハハ、ろんなら貴様の剣術は何流だ。ト拙者は負けぬことが志願ゆゑの流儀は無手勝流と申します。士「然らば何の爲に腰に一刀を帯して居るのか。ト」さればこの刀と申すものは我慢の心を断つものにて人を斬るものでござらぬ」と遣り込めたすると士は烈火の如く怒り「士」小癪な言を吐す奴ぢや無手にて勝つことが出来るなら俺と勝負をしろ」と焦心つて「士」コ、これ何、早く船を岸に着ける」と急性立つたト傳落着て「ト」マア左う急性れすと暫く待ちなさい那處で真劍勝負をいたすと何んな機で人に傷を付けぬとも聞られぬゆゑ唐崎の離島が宜しからう。士「ム、宜し……」船頭早く船を唐崎に着ける」船頭は否といへば相

豪傑物語

手が猪武者で、から直ぐ一刀スツバ抜くだらうと思ひますから詮方なくその言ふが儘船を唐崎に廻しました士は舟が島一着くのを晩しと身を躍らせて陸へ飛び上り刀の目釘を濡しッア来いと身構へたト傳少しも躁かず「ト」わが心を臍の下へしかと藏めなければ起てんから暫らく待たれよ」と徐かに着物の裾を端折り刀を把つて船頭に渡し「ト」一寸その棹を貸せ」といひますから船頭は何心なくその棹を渡したト傳これを手に執るが否や力に任せて前の陸をクイと一突き突いたすると舟は忽ち陸を離れて遙か彼方に開きました士は怪んで大音聲に「士」何故早く来ぬのか」と呼はつたト傳これを見て「ト」これが無手勝流といふのぢやワッハハハ」と笑つてズン／＼船を漕いで往き一町餘りも過ぎました頃扇を揚げてわが奥の手は斯

様でござる。と嘲弄しきしたから士は地圍太踏んで口惜しがり  
ました。が羽根がなれば飛んでも往けず遂う後寛僧主の夫れ  
ならで獨り孤島へ置き去りに成りました。いふよりも、いはでお  
もふはまさるとて、とはぬもとふに、おとりやはせじ。とは斯る場  
合を詠んだ歌でございませう。が學問の上に就きましても世上  
のことに就きましても言葉多きものに物識りはなきものにて  
物事を識る者は言葉少きものでございます。

○徳川家康

(渡橋の迂廻)

膝にいそがばまはれといふことがございませう。が事を爲すに急  
ぎの事なれば善後前を考へずして早急に行ひますと却つて後  
れることがございます。すから急ぐときは廻り遠くとも確かな方

を取るが宜しうございます。冒頭はさて置き豊臣秀吉が相摸の  
小田原へ出陣いたしました。將丹羽長重、長谷川秀一、堀秀政の諸  
將は峯筋から押し寄せました。が徳川家康は山道から押し寄せ  
ました。長政等は山の上から谷間を見下しますと木の蔭蔭れに  
チフ／＼家康の旗馬印が見えました。から何んな風か押し寄せ  
るか見物仕やうと扣へて居りました。家康は隊伍正しく押して  
来ました。が途中に一の谷川がありまして丸木が一本架つて居  
ました。今日なら工兵に命じて見る間に橋を架けます。がその  
はそんな譯けに往きません。から大勢の大敵がこの橋へ行き  
ります。と馬で渡ることが出来ません。から皆な馬から下りて橋  
の上み下を歩行にて越えさせる程なく家康も橋詰に着きまし  
た。三人の大將は遙かにこれを望み、丹家康は東海の名將であ

豪傑物語

るが如何にして彼の橋を渡るでござらうな 堀家康は隠れな  
き馬の上手であれば定めて見事に渡るでござらう 長實に見  
物でござるな 丹左様でおさるや馬から下るやうでござる  
長「辰程これは變でござるな」と睡を凝らして見て居ますと家  
康は橋詰にてヒラリ馬より下り馬をば橋から拾間許り上の方  
をいつき四五人に引かせて徐々と涉らせ自分は徒士の者に負  
はれて橋を渡りました三人の大將の兵卒共はこの有様を見て  
甲「アハハハ、大將たる者が馬を捨てお負はれて橋を渡るとは  
何事でござらうな 乙「イヤハヤ言語同断赤子に齊しき御大將  
でござるてウフ、〜 丙「左様〜 徳川殿は屹度お負はれて  
戰場へ出られるかも知れません 丁「左う言はれると思ひ出す  
ことかござるテ徳川殿が竹千代君とか申された折供の者に負

豪傑物語

はれて小兒達の戦争遊びを指面されたと申しますから矢張り  
だ小兒の習慣が失せぬと見へますアハハハ、 乙「イヤ〜 俗  
に老人小兒と申しますが徳川殿も追ひ〜 お年を取られたの  
で小兒に返られたのでござらうテ實は笑止千万と一同嘲り笑  
つて居ました凡夫といふものは何うも致し方のないもので  
さいますけれども彼等の上に立つ三人の大將は流石に見る所  
が違つて居ます 丹徳川殿は馬の名人と聞きましたがあれば  
と馬上の名人とは思ひませんでした 堀「那れが實に馬の名人  
と申すのでござらうテ凡て馬の名人に限つて危いことは致さ  
ぬ者でござる殊に大事の軍を前に扣へて居ることゆゑ斯く無  
くては相成りませぬ 長「流石は徳川殿でござる天晴な舉動  
感入りましたと三人の大將は家康の振舞を稱めましたがそ

の兵士達の見所るとは雲泥の相違ではありませんか橋を渡れば近いが危険の恐れがありす川上を渉るは安心でございませすが廻り遠いけれども大事が前に在りますから廻り遠くとも家康は確かな方を取つたのでございませすがナントその用意が行届いて居るではございませんかものゝふのやはせのわたし、ちかくともいそがばまはれせたのながはしといふ歌はこの事

○藤田東湖

(西郷に會見す)

藤田東湖は父を幽谷と申し幼少より父の薫陶を受けて人となりましたか明識古今に通じ機智縦横にて天下の英雄を籠絡する手段がありまして水戸第一の人物として世の人に尊敬され

ました西郷隆盛が壯年の頃東湖の名を聞き小石川の水戸邸に往き東湖の面會をいたしましたその時東湖は西郷に向ひ東折角の御來訪であるが只今殿さまよりのお召しにて出仕いたす所ゆゑ暫らく休息下さい程なく飯宅仕るといひ置いて支度そこへ出て往きました西郷はその留守退屈で堪りませんから欠呻ばかりして居ましたかフト床の間を見ますと刀掛に金作り刀が掛けてありますから手に取つて鞘を拂つて見ますと嚴寒の氷を破た如き業物でありますからその切れ味を試さうと思ひエイと言つて柱へ切り付け坐敷中木屑だらけにいたしやがて刀を元の所へ置き脇を枕に胸々高軒で寝て仕舞ひましたすると何時の間にか東湖が飯つて來ましたから西郷は目を醒ました東湖はその木屑を西郷と共に捻り乍ら天下の大勢

豪傑物語

を説じたと申しますが東湖の大量が想ひ遣られます又一説には西郷は有村俊齋と同道して水戸邸に行き東湖に面會いたしましたところ東湖は骨格逞ましくして眼圓らにて眉太く色他まで黒くして額廣く眼はキラ／＼光つて一癖あるべく見えましたから日頃物に臆せぬ西郷も覺えず知らず氣臆れがして初對面の挨拶をしたばかりで一言も出なかつたと言ひますその飯り途西郷は有村を振り返り西先生はさるで盜賊の親分の様だと言つて長服の色が見えたといふ事ですその後西郷は度々東湖を訪れましたところ東湖は西郷の朴率にて飾りのないのを愛し更なかく面白い男だその飾りのない所が俺の氣に入つた余の精神を繼ぐものは陀度お前であると云つて何呉れとなく話し聞かせたといふことです東湖は頗る快活とした

豪傑物語

人で舊生達が來るときは毎も酒を出し懸河の辨を以て談論したさうですが度量もありましたが酒量も餘程あつたと見えます東湖の母親と云ふのは小さな人でありましたから東湖は酒の席などで母親を指し東この小さいお母さんが俺のやうな大きな男を生んだのだなぞと語つたさうです東湖は箇様に磊落な氣質ですうら泣くやうな事はあるまいと思つたと左うでな泣いたことがある東湖が幕府より閉門を仰せ付られました時諸道具は皆賣り盡して仕舞ひ只だ輿が一挺ございましたそこで道具屋を召んでこれを賣り拂つて酒の資と仕やうと思ひましたところ閉門中ゆる輿を担き出す譯けに往きませんから道具屋に断はられたそこで東湖は毎日その輿を眺めては涙を流し「ア、情けないこの輿が賣れたら一杯遣るものを……」とい



つて泣たそうでございます

# ○大石主税

(大義の誓言)

大石主税は大石内藏助の惣領でありまして芝居ですると力綱  
 でございます内藏助が亡君の誓吉良上野助を討たんとその手  
 順を運びます時主税を手許に呼びまして内人生れて十五  
 歳を成童といふ今其方は丁度十五歳に相成つたゆゑ能く父の  
 申すことを聞いて勘考致せ凡そ人の道と云ふものは義より大  
 なるものはなく義は君臣より重いものはない其方の父の此の  
 内藏は君の御恩を受けて居るが其方の承知の通り昨年御家は  
 断絶に及び誓はその儘存生致して居るに依て吾一命を擲て誓  
 を報ゆる積りである其方はまだ御奉公致して別に縁を頂戴致

## 豪傑物語

## 豪傑物語

した譯ではないけれども暖く着物を若腹一杯食事を致して長  
 の年月を何不足なく送たるは何方の御恩だと思ふ皆御代々の  
 君公の御恩徳である其方命を捨て先君の御怨を報つて乃公  
 と一緒に死ぬ氣はないか死ぬよと言つて我子に勧めるは如何  
 にも親たるもの忍びざる所である併ながら生あるものは必  
 ず死す縱令十年二十年活き延やうとも死する時が来れば死な  
 なければならぬ苟も不義を以て活きて恥を千歳に遺さんより  
 は寧し義を以て死して譽を後世に遺す方が宜らう是れ拙者  
 が其方に死を勧め死んで呉れと言つて頼むのは深くその方を愛  
 する所以で其方承知いたさんければ據無なきに依て母と一緒  
 に豊岡へ歸れ此處に己と一緒に居ることとはならぬ何とでも了  
 簡を決して挨拶をせし主税は両手を疊に突きまして 主御父

豪傑物語

七十八  
さまに於きましては如何なればこそ斯様な事を改めて仰せ聞  
けられませうか私不肖ではありますすが聊か大義の分を存じて居  
ります親に背き君に背き不義の名を取て活延びて居ることは  
誠に忍びない譯でござる何うか父上と共に死んで天下後世を  
して父子共に君の御供して死んだといふことを傳へたうござ  
います子孫の譽れを世に遺したうございます何卒御手足纏で  
はございませうが難計に連れ下さるやう願いたう存じます  
母上の御恩を忘却いたすにはあらぬとも大義親を忘れるとい  
ふこともあり況して父上にお付き申して同じく黄泉に御供致  
すからは母人にお構ひ申しては居られずお父さまのお供を致  
して江戸表へ罷り下るべき決心でござれば何分宜しく願ひま  
す此義鬼神に誓て違變は仕りませぬと答へた内藏之助大に喜

豪傑物語

七十九  
び内宜う言うて呉れたそれでこそ此内藏が子である母も他  
日満足に思ふに相違ない然らばさうと決める」と云つて妻子を  
里方へ預けました内藏助は又主税に言ひますには内其方が  
生れた時先君親しく我家に御出があつて赤兒の其方の顔を見  
られて大にお喜び遊ばされ生長の後之れを帯させて呉れと仰  
せられて短刀を賜た又其方が五歳の祝ひの節に御殿よりお招  
きになつて馬場へお連れになり何が欲しいぞとお尋ねになつ  
た時に其方馬が欲しいと申したる所御底の馬を殘らず馬場へ  
列べて其方の目に留たる馬を一つ賜つたことがある先君の其  
方を愛せられたことは斯様である謹んでん忘却致すな主税は益  
す感奮いたし程なく元服いたして名を良金と改名いたし江戸  
へ下つて同志と共に吉良家へ討入り抜群の働らきをいたしま

# ○紀伊國屋文左衛門

(蜜柑船)

## 第一席

紀の國屋文左衛門は幼時文吉と申し父は五十嵐文左衛門と呼び元と和歌山藩士にて八百石を頂戴いたし居りましたがその後故あつて仕を辭し加田の浦へ來て微かに世を送つて居りました文吉幼少より智勇人に勝れ十四の時鰯鮫を退治して人々の難義を救ひましたゆゑ官より褒美として白銀十枚を賜りました文吉はその金にて種々の商業を營み巧みに金を儲け又その金を費消すして貧民に施しましたから人々に敬ひ尊ばれました文吉が十八歳の時でございましてが十月の初めから毎日

### 豪 傑 物 語

### 豪 傑 物 語

西風が吹き荒れて熊野浦は船の出入全く停りましたゆゑ江戸へ積出す蜜柑の荷物は皆熊野浦に山の如く聚りましたけれども幾日待ても風は止みませんしかるに紀州は暖地ゆゑ蜜柑は追々腐敗れて來るそれに江戸からは飛脚が毎日のやうに來て精祭も近寄るのに肝腎の蜜柑がなくては困るから早く送れと矢の如き催促でございますけれども風は益す烈しく相成り海は次第に荒れて凄しい空合でございますから人々は唯だ海上を眺め情けない天氣だ天道人を殺さずといふがこれぢやア天道人殺したと嘆息をいたして居るばかりですこの時文吉は毎日アラ／＼海邊に出て人々と共に海面を眺めて居ました人が皆心配さうな顔付をして居ますのに文吉ばかりは莞爾として居りますゆゑ人々が怪んで聲をかけ悪い天氣ですなとい

豪傑物語

ふと文吉は「文、好い天気です」といふ又「悪い風です」といへば  
文「好い風です」と答へますから人々は皆「文吉さんは氣が遠  
つたアハ、ハ」と笑ひました。文吉は平氣で居ます。斯くて文吉  
は内々船頭の吉太夫といふを招き突然に「文、この風は何時止  
むだらう」と問ひました。吉太夫は眉を蹙めて「吉、急には止ま  
せんなど答へたると文吉は莞爾笑ひ「文、この風の止まない  
内に此から舟を出して一走り江へ行くなぞは面白いぢや  
ないか」吉太夫吃驚して文吉の顔を熱々眺め「吉、冗談云つちや  
ア不可せんこの風は船が出せるものですか出さうものなら  
忽ち打壊れて仕舞ひます」文吉は眞面目にて「文、イヤ冗談では  
ない風が東か北ならば六ッかしいが西風である西風は追手だ  
追手なら何んなに強くとも江戸へ往けない理はない」吉太夫は

豪傑物語

訝つて「吉、ハラねア運が好ければ方に一つは往けるかも知  
れませんが「文、その方に一つを當てにするのが面白いのだうの  
理由といふは今江戸では備祭が近づくの肝腎の蜜柑がない  
から蜜柑の相場は十倍も騰貴して居る然るに此土地にては今に  
も蜜柑が腐敗やうとして居るが一人も買ふ者がないから十倍  
も下落して居る下落して居る蜜柑を十倍騰貴して居る處へ買れ  
ば百兩のものは万兩になる万兩になる大金を儲けるのはこの  
時だ時を失つては不可ん船は私が古船を一艘買ふから貴郎船  
頭と爲る氣はないか」といふと吉太夫は腕を組んで暫らく思按  
して居ました。やがて面を揚げ「吉、宜うがす命賭けで江戸へ  
乗込みませう貴郎も一處にお乗んなさるか」文「勿論一處に乗  
らう商賈は戦争のやうなものだ昔源義経は大時化の夜に大物

豪傑物語

の浦から船を出して四國の平家を攻めた例があるこれ計の慮に恐れて何で大事業が成せるものか運を天に任せて死ぬも病さるも一處に仕よう若し儲つたら充分禮をするからそこで吉太夫も文吉の勇氣に感じ決心して承知いたした文吉は吉太夫の請ひに任せて多くの金を與へ屈強の舟子五六人を募らせ自分は太黒屋の主人に譯けを話しその所有船の中にて最も古い千石積の天神丸といふのを買いさアこれから蜜柑を買ひ集めやうと平常親しい蜜柑問屋へ往つて見ますと人々皆蜜柑の腐敗のに困り果て眞青な顔をいたして居ります文吉は故と問屋の人々に向ひ文「何うです蜜柑は腐敗ますかぬ 問」う十日も経過うものなら蜜柑は残らず腐敗して仕舞ひませうかの腐敗たのは斷念めもませうがこれを捨てるにも若干か

豪傑物語

が掛る泣面に蜂とはこの事です何と工夫はありますまいかと相談をかけた文吉思ふ盡し内心うち悦び文「腐敗た蜜柑を捨てるのに錢が入るなら一文でも二文でも錢を取つて賣るのか宜からう 問「賣らうと云つて買手がないから仕方がない文」うれなら若し買ふ人が有たら幾干でも賣りますか 問「毎日腐敗る蜜柑を片付けるにさへ錢が掛るのですから寧ろ損をして賣りませう 文「それなら私が一箱十六文で残らず買ひ取りませう 問「屋は文吉の言を聞いて大に訝りましたが開店が商人ですから 問「驚きましたね 文「何を…… 問「だつて十六文とは場外な直段ぢやアありませんか 文「腐らせば一文も取れないでそれを捨てるに錢が入るといふぢやア有りませんか私も達てこれを買ひたいのぢやないからマア廢止ませうと歸りか

けた問屋は遠て、これを止め、問屋残らずお買ひなさるなら十六文で買ひませう。文よろしい残らず買ひませう。文吉は他の問屋へ往ても矢張箇様に掛合ひまゝして極く安く蜜柑を買ひ悉く天神丸に積み載せましたから千石船の天神丸も船足が深く水中に沈みました。

第二席

さて船頭の吉太夫は給金を十倍にして舟子を募りましたから忽ち屈強の壯夫が五六人集りました。文吉はそれと聞て大に悦びその者共に吩咐して長い木材十餘箇を舟へ横に架しその両端へ石を結び附けて重量とさせました。丁度その形は簪を挿したやうでこれは両方の重量の船の轉覆るのを支へる爲めです。います文吉は膽力ばかりでなく智慧もまた人に優れて居りま

豪傑物語

するやがて文吉は舟子達と死を決し、天神丸を改めて幽霊丸と名を付け白衣を着て互に別れの水杯を酌み交し夫れより本船に乗り一聲の合圖と共に鎖を抜き半分帆を巻いて忽ち沖の方へ馳去りました。船は箭を射る如くその日の暮には遠州灘を過ぎ翌日は伊豆の沖相摸灘を飛ぶが如くに走つてその翌日未明に江戸の内海に入りました。がこの時稍く風も収り波も静かになりました。から人々蘇生の思ひをなし勇み進んで江戸に着しました。この頃江戸にては吹草祭の日も切迫します。この紀州から蜜柑船の入船がありませんか。頭を延はしてその入船を待つこと一日千秋の思ひでありました。開處へ今この船が到着いたしました。したゆゑ問屋達は雀躍して悦びました。するとこの事が忽ち江戸中の評判となりまして、沖のくらさに白帆が見ゆる

あれは紀の國みかん船といふ話が流行しました江戸市中の蜜柑問屋は紀州から蜜柑船が着たと聞き争つて文吉の船に來りわれ勝に蜜柑を買ひましたから相場は忽ち騰貴て文吉は五万兩餘の金を儲けましたそこで文吉が熟考へますには此頃は西風に江戶より大坂へ船一艘も往かないから彼地にては鹽鮭の品切れであらう今江戸では鮭が澤山あつて直段も極く安い幸ひこれが大坂に持つて往つて再び大儲けを仕ようとする理由を舟子達に語りました舟子達は文吉を神の如く尊信して文吉の命なら忠天竺へでも行かうと答へましたそこで文吉は鹽鮭を夥しく買つて船に積み日和の直るを待つて大坂へ出帆いたしましたが今度は西風の返しにて東風ばかり吹きましたから忽ちの内は大坂の港へ入船して此でも又數萬兩の利益を得ま

した運とは申ふしながらナント強勢なものではございませんか

○木村重成

(大量の事)

木村長門守重成は父を常陸介重茲と申しました重成は眉秀で鼻高く眼清くして眦少し上り色白く口元愛嬌あつて頗る美男の評判がございしました重成の母は豊臣内大臣秀頼公の乳母でありましたから重成も近習に召出され常に圍碁の相手などいおしましたある日重成は秀頼公の召により急ぎ出仕いたしましたが廊下の暗い所にて茶道坊の山崎三彌といふ者の腰物の鑑を袴の裾にて引掛けました重成はこれに氣も付かず御前へ出て御用相済みましたゆゑ退出なさんと廊下を傳へ往きます

豪 傑 物 語

所を暗中から突然に「無禮者奴ッ」と呼ばり扇子を以て重成の背  
中をハツシと強く打たものがあゝる重成はへ下り小剣の柄へ手  
を掛け何者なるか斬捨んと身持へますと山崎三彌が憤然とし  
て立現はれ三アイヤ長門守殿先刻貴殿には某の腰の物を足  
下にお掛け成されて何の挨拶も致されぬは茶道三阿彌は腰の  
物をば足にかけられても彼れ是れ申さぬといふ思台ですが手  
前も上よりお祿を賜はりスワ戦場と申す時は罷出で一ト庶の  
御奉公を致す心底でござる申上げずとも貴殿は御存知でござ  
うが之れを指して扶持方棒といふ男子の魂でござるそれを足  
にかけて挨拶も成さらぬは何事ぞサア立上つて尋常に勝負を  
致されいと眞赤に成つて怒鳴つた重成は莞爾と笑ひ一言の應  
へもせずツトその儘城中を退きました是れより三阿彌は人々

豪 傑 物 語

に向つて長門守は臆病だ〜と云ひ觸しましたから常に重成  
が秀頼公の寵愛あると嫉む輩は之れを機として彼方の役所に  
ても此方の役所にても種々に重成を譏り長門守と書いて臆病  
と讀ませろイヤ木村の傍には腰の物を置くな臆病が傳染るぞ  
と城中一般に重成を臆病、臆病だと云ひ唾しました爰に大坂  
七手の番頭に速水甲斐守時之といふ人がございましたこの七  
手番頭は大岡秀吉が武勇饒れた者七人を撰んで城中を警固さ  
せたものよてその機に當るは所謂一騎當千の剛でございま  
す速水甲斐守時之は重成の武勇と底采とを慕ひ堀田剛吉、介  
を媒介としてその娘を重成に嫁がせんと云ひ込みました重成  
も速見が文武に達し且つその娘は有名な賢女だと聞きました  
から結婚の儀を約し各約定書を取り交しました然るにこの頃



豪傑物語

ろ城中一般に重成は臆病だといふ評判が高くなりまし  
たから甲斐守は聞捨てに成らんと重成の邸を訪づれて對面を  
乞ひました重成は同心なく「重」ヤこれは「速水氏能うこそ  
御尊來」と寒暖時候の挨拶を述べました後「何御用筋にて御尊來  
に候や」と問ひますと甲斐守は袴の折目正しく「甲」さて長門守  
殿餘の儀にも候はねど堀田圖書介を以て某の愚女を尊公様へ  
進せやうまた尊公も貰ひ受けやうと云ふことで約定書を取換  
しましたたが都合に依つて娘を進せることが誠に難儀でござる  
ゆゑ何うか約定書をお返し下さるやう又某が頂戴の御約定書  
も尊公様へ返上致しまする」といふ重成聞きて「重」速水氏手前  
から御息女を申し受けやうと申し入れた儀ではござりませぬ  
と堀田圖書介を以て婚姻の義を申入れられましたゆゑ年

豪傑物語

齡と云ひ豫て御利發のことも承知致せしに依つて御息女を頂  
戴いたさう貴殿も手前方へ遣はさうと約定書を取り換はした  
のでございませう然るところ最早婚姻の時日も近きに迫つて  
居るに俄かに約定書を取返して参られやうと云ふ貴殿のお言  
葉でござるか足には何か仔細があらうと存ず承りたいと云は  
れて速水甲斐守は包み隠さず茶道三阿彌が一伍一什を語り何  
故尊公はその場にて三阿彌を斬捨て召されぬ「直成これを聞い  
て速水氏貴殿は年齢はお幾歳に成られますか」と意外な問ひ  
です速水は何の氣も附かず手前は今年四十九歳に成ります  
重人間四十九と申せば最早思慮の定まる時でございませうと  
の長門に心得違ひでもあらば貴殿は御教訓下さらねば成らぬ  
御年配ではござりませぬか然るに茶道坊主三阿彌の無禮を答

豪 傑 物 語

め殿中にて何故斬捨てぬとの御言葉は何事でおざります手前  
が一刀の鞘拂ひは家潰れその身は切腹これは申上げるまでも  
之なく手前は茶道坊主位を斬つて命を捨てるやうな狼狽者で  
はござらぬ申すは恐れ入り候へども今にも敵來つて大坂城を  
取巻き攻め立てられぬとも言はれましますその節は君の御馬  
前に於て働いた上にて敵はねば美事討死いたする長門守重成  
でござる茶道坊主風情と命の取り遣りをしてしまするやうな者で  
は毛頭ござりませぬ彼は蠅の如き者にて取るに足らぬ者で  
ざる併し彼是の論は無益の至り約定音は只今御返し申ゆゑ  
持ち返りなされといひましたから速水は大に怒りイヤ恐れ入  
たる只今のお言葉誠に某は唯一徹短慮前後の考へもなく何故  
お斬捨て成さらぬと申せしは全く心得違ひ何とも申譯けなし

豪 傑 物 語

平に御容赦下されよと謝罪してゐる場を退きましが重成は心  
中にて速水は好人物だと思つて居りましたさて速水甲斐守は  
重成の言行をば詰所々々の人々に遇つて長門守は三阿彌を蠅  
同様に見て取るに足らぬ者であると語りましたが全くそれに  
相違ござらぬと話ししましたゆゑ人々これを興あることとして  
山崎三阿彌は蠅坊主でござる蠅坊主だ蠅坊主だと罵りました  
のを三阿彌聞尤めて蠅坊主とは誰の事ぢやといへば他の坊主  
は打笑ひ山崎お前は今日から蠅坊主と改名いたせ「ナセ」木村  
長門守殿がお前は蠅同様だ蠅の如き者は對手にするに足らぬ  
と云はれたさうだといふを聞きましたから三阿彌は烈火の如  
くに怒り「ヨシ好く己れのことを蠅坊主と云つたな思ふ存分彼  
奴の頭顱を打て呉れん」と鉄拳を固めてその機を窺つて居りま

豪傑物語

した爰に故太閤が朝鮮より取寄せられました玻璃風呂といふ  
 がありまして秀頼公御入浴の後臣下にて入浴を許されるこれ  
 所謂お流頂戴でございます時しも五月雨のことにて蒸氣充分  
 に籠つて人色も辨れ兼ねます三阿彌は思ふやう今入浴中なの  
 は必定長門守ならん日頃の鬱憤を晴すはこの時だと喜び勇ん  
 で鉄拳を固め長門守の頭上を丁と打ちました然るに豈に圖ら  
 んこの時入浴して居たのは薄田隼人正兼相でありました薄田  
 兼相は初め岩見重太郎と呼び天の橋立にて多勢の敵を撃殺し  
 て日本千人力士の首魁と稱へられた剛の者でありましたから  
 斯と見るより大に怒り躍り上つて刀の鞘を拂ひ入浴の處を覗  
 つて打つとは卑怯千万サア此處へ出て真劍勝負に及べと呼は  
 つた三阿彌は薄田の破鐘の如き聲を聞てコハ失策たりと狼狽

豪傑物語

廻るのを薄田は見てハ、ア彼奴我れを木村と思ひ違へて打つ  
 たのだなヨシ彼奴の頭顱を打つて懲らして呉れんと矢庭に三  
 阿彌の首筋を押へて捻伏せ「ヨシ三阿彌よくも汝は木村と間違  
 へて我れの頭上を打つたな覺悟いたせ」といふが否や丁々發矢  
 と三阿彌の頭上を打ちましたから慄れ三阿彌はウンと叫んで  
 氣絶した薄田隼人はこれを見て呵々と打笑ひつゝ出て往きま  
 した斯る處へ重成も入浴に來ましたと三阿彌が氣絶して  
 居るのを見て急病だらうと思ひまして直に印籠より薬を出し  
 水を口に注ぎ背部を打ちなせして種々に介抱しましたから三  
 阿彌は稍く蘇生しましたが重成を見て「ア、申し譯けもござら  
 ぬ」と涙を流してその罪を詫言したゆゑ重成は微笑して「人間  
 は總べて斯くこそ心掛けべき者なり薄田隼人は其方を打つて

命にも及ばうと云ふはどの事然るに長門は打たうとした其方を却つて介抱いたす平生は物柔かにして戰場に臨めば一步も下らず敵を微塵に碎いて其名を留めるのを勇士の覺悟とこそ申すぞよと懇ろに諭しましたから三阿彌は益す感激し秀頼公より仕へを辭して重成の家臣となりてその姓名を山崎三左衛門と改め重成が若江にて討死いたしました時殉死したといふこととございます

○水戸光國

(忠勇の美談)

第一席

水戸光國卿は中納言頼房の二男で有名な賢君でございますその一生の美談は一朝一夕に申し盡されませんが今ろの中で二

三の事蹟を摘んで口演いたしませう光國は幼名を長九と呼び三歳の時に書を能くし又事理に通じました京都の呉服屋に松葉乗九と申す者がありまして水戸家に入りましたたがあの時乗九長九の機嫌を取らうと思ひ殊更勇壯い物語をなし乗若様お聞き遊ばせ私が商用にて唐土に渡りました折一天俄かに掻き盛り怒れる海は空を衝き四五里の間は船を寄せる所がございません雲は墨を流した如く暗く雨は吹暴れて盆を覆す如く實に後凄うございしましたすると白い額の猛虎が巖陰より躍り出でその叫ぶ聲は天地を震動いたしましたアツと驚く所に忽ち波間より龍が顯はれその眼はギラ／＼光り恐ろしき何とも譬へようがありません魂も身に添はずよくも見届けませんでしたと勢ひ込んで語りました長九微笑して長アム其

豪傑物語

方はそれを何處から眺めたのかと一ツ突込ました。乗「エーその何で……」實はエーその何でと乗九答へに詰り額より汗をダラ／＼流し「今日は何うかこれにてお暇を賜はりますよう」と早々退出したといふことであります又ある日父頼房は試みに光國に向ひ頼長丸や若し戦争でも始まつて予と汝と共に戦陣に出て予は敵に負けて傷さ斃れたら汝は急いで予を介抱するか如何じや」と問はれますと光國は奮然として「光「イエ」決して左様な女々しき事は仕りません見は父上の屍を乗り越して父上を斃した當の敵と引組んで討死いたします」と答へたので頼房も思はず微笑されたといひます寛永十六年の夏頼房は光國の水泳を試さうと思はれ淺草川の三股に往き「この川向ふまで泳いで見よ」と云ひ捨て頼房まづ先さへ泳ぎ往きました光

豪傑物語

國は少しく後邊に下り容易く向ふ岸へ泳ぎ着きましたが近臣は光國が若し沈んだら助けようと思つたといひます今日にでもともこれは父頼房の本意では無かつたといひます今日にでも三股は川幅の廣い所ゆゑ未熟の者は渡り難ねますのに寛永の昔は遙かにこれよりも廣かつたと申します然るに光國は此の時齡僅か十二歳でありました光國はそ腕力も非常に強くして鉄の火箸をキリ／＼と捻ると繩のやうに縛れたといひます又狩場にて暴れ狂ふ猪を見て己れツと云つて鉄拳を上てその鼻づらを丁と打つたすると鼻づらは眞二つに割れ猪はその益斃れたといひますが恐ろしい力ではありませんかされば容良は悪鬼羅刹の如きかと云へば決して左うでない顔は長く色白にて目は細く少し釣り上り鼻筋通つて若年の時は美男の評判

豪傑物語

高く一見して大將の威儀が備つて居たといひます又その性質は細密にて何事でもよく知つて居ましたある日原某といふ者が公用にて那珂の別邸へ赴きましたすると丁度光國は何れへかお出掛けに成るところでありましたから原は別間に通り近習に向ひ原殿には只今何れへか御出向き遊ばす御容子ゆゑ明日まで逗留いたしますから拙者今日罷り出でたる儀は言上成さらぬように……と遠慮して口止めいたしましたと光國早くも換越しに之れを聞き私の事で公の事を慮しては成らぬとあつて直ぐ出遊を止めて公用を済ませて原に向はれ光國は氣の時節大儀であつた幸ひ華藏院より麥粉を貸ひ置いたから予が手打の冷麥を振舞はう其方は夫れにて見物せよと諸道具を取寄せ光この鹽加減と冷麥とは鹽加減ばかりのものぢやと

豪傑物語

語りながらトノノ打つ拍子といひサクサク切る時の模様とひその巧者なことは實に驚くばかりでありましたやがて切て仕舞ひましてから光何と我を折たか如何ぢや原ハッッ驚き入つたるお手際恐れ入り奉ります光予は先年江戸淺草邊でこれを作るのを見て度々その真似をして拍子を覺はたがろのたびく手製したすべて食物の事は自分が製して試みることであるぞ又江戸の邸中にては田畠を作る事も習つた姫なぞは京の出生ゆゑ上品の事は何れも知つて居るが下賤の事が厭らぬ下賤の事が解らんと愛憐の念薄く人情不通なるものゆゑ予は自身に股穿き苗を植えて見せた又山組の内の功者な者に臼杵を取寄せさせて米を搗いて見たこともある儀を焚かんとして水加減とぎやうなどを習ひ度々焚いたがこれは雑

豪傑物語

作もないことちや魚鳥の料理は料理番に習つて覚えたり  
ましたから原は益す感服して退出したといひます  
が世間大抵の事は皆知つて居られたと申しませ  
す光國が一生の中にて最稱賛すべきは忠孝の二  
字でございます次にくの忠孝の事を述べませう

第二席

光國は忠孝の志厚くいたして若年より老後に至るまで正月元  
日の早朝に身体を淨め冠裝束を着け京都の方に向つて遙拜い  
たしました今日では小學生徒は勿論何人も御尊影を掲げて遙  
拜いたしますが光國の時には天朝を尊ぶ者は稀れでござい  
ます中には勤王の大義を辨へる者がありましても徳川氏を憚  
かつて屏息いたし居ります然るに光國は徳川氏の一族であり

豪傑物語

乍ら楠正成の碑を湊川に建て又は大日本史を編んで勤王の意  
をあらはしました常に天子は我が主君である將軍家は我が宗  
族である取り違へては成らぬと云つて大義名分を明らかにさ  
れました父母の喪中は食事を減じ父の喪後始めて水戸へ下向  
された時には先づ齋戒して衣服を改め父の廟前に伏拜して落  
涙數刻に及び又祖父の年忌祥月には或は三日前或は前宵より  
清淨なし一室に引籠り朝夕の配膳は一汁一菜酒を廢し一切の  
遊興は固より好きな詩歌さへも吟詠されなかつたといひます  
水戸の藩士に藤井紋太夫といふ者がありました才學人に勝れ  
何事にも書籍を引き是非を決すること水の流るゝ如くであり  
ました光國はろの才を愛で老職に登用しましたが後に至り驕  
慢の心盛んになり悪事増長いたしましたさて光國は古稀の齡

豪傑物語

となり再び水戸へ出ることもならんからとて能を催ふされま  
した見物には旗本の客一二人と他は藩士の重なる者の妻子で  
ございますその日は光國自身も舞ひ能の仕舞ひ際に成つて光  
國は樂屋に入り毛氈一二枚敷せ小姓に向ひ 光「紋太夫を尋べ  
小ハッ長りました」小姓は紋太夫に「君のお召でござる」と告げま  
したから紋太夫は切幕の際に来て御前に拜伏いたしました光  
國これを見て 光「紋太夫是へ是へ……」 紋「ハ、ッ」紋太夫は二  
尺四五寸の脇差を脱ぎて進み出でました 光「イヤ脇差はその  
儘差して参れ」とありますから紋太夫は君命に従ひ恐るゝ樂  
屋の中に入りました入口には近習の士が兩三人扣へて居るば  
かりです光國は懐中から一通の書付を出して紋太夫に示し辨  
解あらば辨せよと云はれました紋太夫最初の二三ヶ條は言ひ

豪傑物語

解きまゝたが後には唯だ恐れ入つて平伏いたしました光國は  
赫と怒り「中將殿(綱條)の爲にも良き者と思ひしに己は不所存者  
である」と云ひながら金剛力にて取て押へ紋太夫の脇差を抜い  
て一と突に脊より板敷まで突通しました紋太夫誅せられて後  
ち妻子一族朋友まで處刑すべしとの評議がありました光國  
は咎は彼一人なりといつて他の者は處刑されませんでした光  
國が仁愛の事蹟は一々數へ盡されせんから今その中で一ツ  
お話し致しませうある日光國が愛んで飼ひ置かれる鶴を天神  
林の農民長作といふものが誤つて殺しました流石の光國も大  
に怒り直に長作を捕へて入牢申し付けましたその後那珂の賣  
賣問に赴かれた時五百城嘉忠を呼び 光「罪人共を是へ出せ自  
身に成敗致さむ」と云はれましたから嘉忠は罪人をお庭先へ引



出しました光國は明晃々たる一刀を抜放ち刀の背にて五六邊  
罪囚の肩を打つアツヤ首も前に落んとする時光國俄に中村願  
言を振返り光此者を殺すとも鶴は生きて返らず禽獸故に人  
を殺す事道にあらず助け遣はすべしとあつて死刑を宥し退放  
に處しその上へ食ふに困れば又如何な事を仕出さんも知れず  
と自身は知らぬ振をして密と家來に命ト米穀路銀を與へて立  
ち去らせましたやがて光國は坐に歸り巳が心事を打明して  
光鶴を殺すのは天下にも我家にも大法の刑あり殊に予の秘藏  
せるものを殺すは憎みても尙ほ餘りありされど我が腹立をさ  
へ忍べば助くるとも法度の妨にも成らず一人を殺す事は大  
切なことである況して禽獸の故に人を殺すことは尙更らと存  
する念忽ち心中に浮び顛りに不惑になりて助け遣はしたと語

られました人の上に立つ者は皆箇様に仁心がなくては成りま  
せん

○兒島高德

(行在所の櫻)

兒島高德は備後三郎と稱へ備前の人で其先祖は新羅王子天日  
槍命から出たといひます高德は幼少の頃より書物が好きであ  
りましたから忠孝の道は固より好く辨まへ居りましたさて後  
醍醐天皇が逆賊北條高時を誅伐なさん爲め笠置に在ませしと  
き高德は四方に奔走して兵士を募り王事に勤めやうと謀りま  
したゆゑ主上は御威斜めならず錦の御旗を高徳に賜はりました  
たけれども事未だ成らざるうちに笠置も落城に及び楠正成も  
自殺したと聞き大に力を落し顛りに嘆息いたし居りましたす

豪傑物語

ると高時は勿体なくも主上を隠岐國に流し奉ると聞き悲憤に  
堪へず一族郎黨を召び集めて高「この度北條高時恐れ多くも  
主上を隠岐の國に遷し奉ると聞く實に悲憤の至りに候はずや  
古人も志士仁人は生を求めて仁を害することなく身を殺して  
仁を爲すといへり義を見て爲ざるは勇みなしいざや臨幸の路  
次に参り君を奪ひ取り奉りて大軍を起し縱令屍と戰場に隠す  
とも名を天下後世に傳へんは如何に各々の意見承りたし」と云  
ひ出しましたところ一族は皆奮つて「天晴勇ましき御企て吾々  
共君の御馬前に討死いたし候はむ」と異口同音に賛成いたしま  
した高「さらば路次の難所に相待てその隙を窺ふべし」と衆を  
引具して備前と播磨の境になりませする船坂山の嶺に隠れ今や  
と待受けて居りましたが餘り臨幸が遅ふとございますから

豪傑物語

人を走らせて見せに還りましたところ忽ち馳せ坂つて「警固の  
武士は山陽道を取らずに播磨の今宿から山陰道にかゝり遷幸  
を成し奉ります」と告げたるので高德の計畫は喰違ひました  
けれども高德屈せず高「さらば美作の杉山こそ究竟の深山な  
ればこゝにて待ち奉らん」とそれより三石の山より道もなき山  
間の雪を踏で那坂に着きましたそこで往來の者に主上は何時  
頃御臨幸あらせらるゝやと問ひますと主上には早や爰所を過  
ぎて院の庄へ入らせ給へりと答へた人々皆落膽いたし最早や  
如何ともすべからずと散々になりました高德は遺憾遺る方な  
くせめてわが所存を上聞に達せむと思ひ物具脱棄て、義笠に  
身を窺し潜かに御笠の跡をつげ行くこと五六日隙を窺ひまし  
たが警固殿しくして少しも隙がございませんそこで夜窺かに

豪傑物語

御館を窺ひ御庭先へ忍び入り四方を見廻はしますと流石警固の武士も旅の疲れに思はず眠を催ふして居ますアト傍を見ますると大なる櫻の木がありますからこれ幸ひと短刀引抜いてその皮を削り

天莫空勾踐時非無范蠡

と十字の詩を刻みつけその儘行在所を立去りました翌朝に相成り警固の武士共これを見つけて甲「ヤ那の櫻の木に何事か書いてある乙「珍文漢文で唐人の寝言一向解りませぬな丙「佐々木道譽殿へ申し上げたなら解りませう甲「イヤ寧そ上聞に達したが宜しうござらう一同成程夫れが宜しい」とその中の一人が御前へ出て斯くと言上いたしました主上には徐かに御櫓先へ出御ましましてろの詩を熟らく御覽じて龍顔殊に御

豪傑物語

快よく笑ませ給へども武士共はろの譯けを知りませんから訝る者もございませんでしたさてこの詩の意味は昔し支那の國の周の世に越王勾踐といふ人がありまして吳王夫差と戦つて大敗北に及びました然るに勾踐の臣に范蠡といふ者があつて種々に智容を廻らして遂う吳の國を滅ぼしたといふ故事がございますからこれを引て己が身を范蠡に比べ主上の御爲に忠義を盡すものがあるゆゑ宸襟を安んじ給へどほのめかしたのでございませすその後主上は名和港に遊れ給ひ土地の豪族名和長年主上を迎へ奉り義兵を船上山に擧げました高德これを聞て喜び勇み父範長と夜を日に繼で馳せ參上諸將と各所に轉戦して終に北條氏を滅ぼしました或る説にては高德は無形の人物だなどといひますが現に兒島郡木見村城山といふ所は高德

の城趾にてその基礎が今に残つて居り時々瓦の片碎などを掘り出すといふことでございます

### ○力士谷風 (畫と腕力の交易)

#### 第一席

谷風棍之助は伊達家のお抱へ相撲にて古今獨歩の力士でございます  
います谷風が大坂へ行つて興行して居ます時ある日儒者の中  
井竹山に出逢つた竹山も固より相撲好きですから種々腕力話  
が出た、すると竹山が谷風に向つて 竹「今谷風は相撲に於ては  
古今獨歩と云はれて居るが俺と枕引きをしたなら逆も勝てま  
い」と高言を吐くと谷風が 谷「是は思ひも寄らぬことを承りま  
すがそれでは貴下は餘程枕引きが強いと思つて居るし又是まで度々相撲取なせよ

### 豪傑物語

### 豪傑物語

様さ自分でも強いと思つて居るし又是まで度々相撲取なせよ  
枕引をしたことがあるが負けたためしが無い或は碁盤を持つ  
て蠟燭の火を消すほどの力を指先に持つて居る 谷「これは面  
白い話でございますますそれでは先生と一番やりませう」と言つて  
枕を取り互に畢生の力を出して競つたところがナカ／＼竹山  
の握つて居る指が離れない谷風は廣い坐敷をクル／＼二三度  
引廻したが何うしても竹山が離しませんから遂に笑つて止め  
たといひますそこで谷風は大に感じて「貴下のやうな大學者の  
方の指先に此様な力があるといふのは實に不思議でございます  
す此の位むだにいたことはございませぬ」と言つて夫れから谷風  
は度々竹山の處へ遊びに往きましたある日竹山が門人に向つ  
て講義をして居る處へ谷風が來合せて聴いて居ましたが忠告

豪傑物語

のこゝを説く時は腕を組み俯いて熱心に聴いて居て甚しく感  
じた見え講義が了ると竹山に向つて「谷私に學問なぞは勿  
論存じませんが唯今の御講釋を聴いて是非學問しなければ成  
らぬものであると云ふことを感じました就ては今日より先生  
の門人になすつて忠孝と云ふことを教へて下さい」と言つたそ  
こで竹山も谷風の望を容れ早分のするやうに忠孝の道を説  
聴かせた其後竹山が人に向つて「竹俺れほど天下に傑出した  
者を門人に持つて居るものはあるまい力士では谷風棍之助あ  
り金満家では鴻の池善右衛門あり随分自負しても宜からう」と  
言つて笑つたといひます或る日竹山が谷風の家へ遊びに行つ  
て床の間を見ると相撲を一人書いた大幅の掛物がかけてあり  
ますから能く見ますと其相撲はいつも谷風の相手になる西の

豪傑物語

方の大隈小野川の肖像であります如何にも合点ゆきませんか  
ら谷風に向つて「竹こゝに小野川の肖像が掛けてあるのは云  
ういふ譯か相撲が摩利支天を祭ると云ふことは聞いて居るが  
相撲を祭るといふのは聞いたことが無い殊に平生お前に負け  
て居る小野川の像を祭ると云ふのはどう云ふ譯か是には何か  
仔細があるだらう」と云つて聞いたところが「谷左様でござい  
ます此肖像は私が拜まなければならぬ譯がございませぬ私の相  
手の小野川關は強い力士でございませぬが何うした譯か私と取  
りますと都合が悪うございませぬが私に勝つのでござい  
ませぬが相撲取によりませぬと自分が勝つてぬ相撲と見る時は相撲  
法にない手を取つたり土俵の中を狂ひ廻つたりして見物人に  
醜いやうな相撲を取ります此の小野川に限つてはいつも私

豪傑物語

の息も切らせずに立合ひ仕切りも念を入れまゝ手に汗を凝  
 つて立合つて呉れますどうも相撲を漫りに取らぬ人だと思つ  
 て感心して居ります斯る人があつてこそ私を強いか相撲を  
 能く取るよか世の中の人が申してくるのでございませう夫れ  
 ゆゑ私の身に取つては摩利支天を祭るより此人を祭らなけれ  
 ばならぬと思つて斯様に肖像にして拜んで居りますと云つた  
 ので竹山も大感心し是は唯だ相撲ばかりでない何事にでも  
 善い手本であると言つて人に話したことがございませう谷風の  
 前後にも強い相撲は幾人もございませうが後世に至るまで谷風  
 を々と言つて人口に膾炙して居るのは全く谷風が普通の力士  
 でなかつたからでございませうさて有名の畫家丸山應舉と谷  
 風が筆力と腕力の交易といふ面白るいな話しは次席に演べま

せう

第二席

豪傑物語

谷風は或る年大坂の相撲を濟ませて京都に上りました京都に  
 は毎年相撲興行のあるのが例になつて居りますが其年は殊に  
 紫宸殿の前に片家を造らせられて光格天皇の天覽相撲を行は  
 せられましたその時谷風は小野川とも取組み他の相撲とも御  
 好みで取りましたが陛下は谷風の強いといふは愚か相撲の取  
 り方の体様から凡て品位のあることを甚く御賞しになり谷風  
 を御棧橋の處へ召されて親ら谷風の肩を御撫でになつて天下  
 第一の力士であるを實に勇々しき者であるぞと云ふ勅語があ  
 つて重藤の弓を賜はりました時に丸山應舉は世の中に名を知  
 られて當時大和繪では駢ぶ者なく俗には眞に日本一の畫工で

豪傑物語

あると言はれて居ましたそこである時谷風が應舉を尋ねて  
谷先生私の爲めに繪を描いて下さらぬか別にお禮はしませぬ  
が貴下は筆力で繪を描いて下さい私は腕力を以てお禮をしま  
す腕力と筆力と取換へをしたいものでございますと言ふと應  
舉はハタと膝を打つて 應「これは面白いのでございますが書きませう  
併し繪は書いたものを江戸へ送ることは出来ませんが關取の力  
は飛脚に頼んで送ることは出来まいそれは何うしますか 谷  
「いづれ私が出立するまでに必ず御返禮を置いて行きます 應  
「それは面白い待つて居ませう」と互に約束をいたしましたする  
とある日家々のまだ起き出でませぬ拂曉に應舉の家の前でズ  
ンンといふ地響がしたから應舉の家の人は地震かと思つて  
飛起るとさうでもない何事かと怪んで出て見ると谷風が相撲

豪傑物語

の稽古廻しをしめて笑ひながら汗を拭いて居るから不審に思  
つて關取「是はどうした事か」と聞くと 谷先生「お禮を持つて  
来た」と云ふて下さい」と言ひますから應舉が出て見ると 谷先  
生「お禮をしやうと思つて人を頼み鞍馬山へやつて庭の石に  
なりさうなものを見立て、貰つて手傳を使つたと云はれては  
濟まぬから昨晚呼出し奴の子供をつれて行つて其石を引摺い  
で来ましたは自分の身体が潰れるかと思ふほど重かつたが  
漸く持つて来ました是は先生に繪を願つた私の腕力のね禮で  
ございます」と言ひましたから應舉の怪力に驚いて「これは何  
うも忝けない」とその好意を謝しまして 應「何しろ其の石をそ  
こに置かれては困るから兎に角庭へ入れて貰いたい」と云ひま  
したけれども其時は最早疲れたと見えて易々とは入れられな

豪傑物語

百二十二  
かつたが力踏みをして其の石を抱き込み庭へ持込みました。さて谷風は其年は江戸に歸り翌年また例の如く大坂の相撲を遊ませ京都へ行つて應舉に繪の催促をいたしましたところ、應「イヤ決して打遣つて置く譯では無いがどうもあの時の勞力に酬ゆるだけの繪を描かうと思つて種々苦心して居るのでまだ出来ない」と云つた。夫れから三年目に又例の如く谷風は大坂を経て京都に往つて、谷「先生もう出来ましたらうか」と云ひます。應「ヤツと出来た」そこで谷風が「どうも私などは腕ですることだから直さに出来ませんが同トく腕ですることでも先生方のやうに筆を以てすることや又は文章などを作ることとは催促しても容易に出来ぬと云ふことは知つて居りますが餘り長いから何うしても書いて下さらぬければ元の處へ石を待つて行つて

豪傑物語

返して來やうと思ひましたが出来まして有難うございます」と言ひました。その時應舉の持ち出した繪は横七尺ばかりの絹に重藤の弓を一挺書いてありました。谷風はこれを見て先年光格天皇より賜つた重藤の弓を書いて呉れたのであると思つて再拜して喜び厚く禮を述べ歸りました。その後應舉が人に語つて「谷風大關から頼まれた繪には實に苦心したその苦心は斯の如くである」と云つて見せたものはその弓の下書であつた。紙へ書いた者を絹へ書いたものが數知れぬほど反古になつて居た。なせ筒様に苦んだかと云ふに七尺からある絹へ横に重藤の弓を一挺書くのであるから弓の方を書くのは易かつたがそれだけ長い弦を定木などに掛けずして思も吐かず一息に書かうとしたから幾度書いて途中で呼吸をする爲に終りまでの間



に氣が切れて書けない弦の爲に斯の如く苦心して漸く氣の切れないものが出来たから谷風に遣つたといふ話であります。谷風は唯だ相撲ばかりでなく何事も非凡な人物であつたといひます。序でに應舉がおゐる。そかに書を描かなかつた事を次に題を改めて演べませう。

○圓山應舉

(大物の寫生)

圓山應舉がねろそかに繪を描かなかつたことは谷風に弓を畫いて道つたのでも知れませう。が應舉が鶏の實物を寫し又を猪を畫いたことは人口に膾炙して誰れもよく知つて居ます。その逸事を一ツ演べませう。只今三井寺の寶物に成つて居ます。七難七福の圖と山の朝ぼらけの繪は三井寺の圓滿院の宮様の

豪傑物語

命よつて描いたのであります。さうですが七難七福の圖を畫くには實に久しい間苦心何度も草稿をしたものだといひます。ある日宮より比良山に登つて江州の三上山初め見える丈けの山々の朝ぼらけの景を書けとの命がありました。日はまだ出ず山は糺糊として居る所の景を寫生するので山水といふ大物の寫生であります。から應舉も餘程苦心をしたと見え十六枚の下圖を取つたさうです。さてその下圖は何うして付けたかと云ふと三井寺のお構内より比良山まで一里半餘もあります。が道の駕籠にも乗らず夜の中に家を出で比良山へ登つて凡そ十五六日間も通つて書いたのであります。が何にしる夜の引き明け頃には比良山へ行つて夜明けの圖を書いたのです。から中には雨の降る日もありましたと見えて雨天の時の景夜明けの景

の有様などが實に面白く書いてあります應舉が山の朝ばらけの景色を寫生する爲めに遠路を厭はず毎曉比良山へ登つて寫したといふ熱心と氣力には感服するではありませんか

### 源爲朝

(弓矢の激論)

源爲朝は鐵西八郎と稱へ日本一の弓の名人で六條判官爲義の八男でございます性本力強く右の上左の腕が右の腕より四寸ばかり長いので自然と弓を弾くのに妙を得て居りましたそれゆゑ氣質も荒々しく時々兄さん達と争論をして果くは腕力に訴へ散々苛めますので爲朝も困つて居りました爲朝が十三の時でありすがある日新院の御所にて藤原信西入道と云ふ學者が畜物の講義をいたしましたその時信西入道が「現今の武士

### 豪傑物語

### 豪傑物語

の中で名人と云はれるのは平清盛源三位頼政この兩人の他はあゝるまいといひましたすると爲朝は蔭でこれを聞き「ワ、ハ、源三位はまだ宜いが那の清盛の腰拔奴が何で弓矢の名人だ信西といふ頭苦入は大馬鹿者だ物を知らないに程がある」と大聲にて嘲り笑つた信西これを聞いて大に怒り直ぐ爲朝を呼びつけ威丈高に成つて殿しく叱りましたが中々屈しませず却つて反對に信西を議論で遣り込めてしまひました爲義はこれを見て大に怒り小兒の癖に場所も憚からず御前に於て高位の人と議論をするは不埒千万斯る生意氣な者は我が家に置くこと罷り成らんと言つて遂に爲朝を九州へ放逐して仕舞ひました爲朝は九州へ放逐されたのを反て幸ひとしまつ肥後の熊本に陣をかまへ菊地原田の諸大名と戦争をして大小の合戦二

豪傑物語

十度に及びました。が只の一度も負けたことなく十八歳の時に  
 は遂に九州を靡き従へ自ら鎮西八郎と稱へ武威を振ひました  
 そこで朝廷でも棄て置かれせんから兵士を發して爲朝を  
 征伐とせました。が何時も反對に追ひまくられて仕舞ひますか  
 らそこで爲義を謀反人の親だと云ふ處から嚴しく事になりま  
 した。爲朝はこれを聞きて大に驚き自分の爲に父が附せられて  
 は實に申譯けが無い事だと家臣十餘人を連れて急いで都に上  
 り今までの罪科を詫びて神妙に朝廷の御沙汰を待つて居りま  
 した。すると間もなく保元の亂が初まりました。これは新院と近  
 衛院との戦で近衛院の方には平清盛源三位頼政並に爲朝の兄  
 左馬頭義朝などが属して居ます。又新院の方には左大臣頼長藤  
 原信西などが属して居ます。けれども近衛院の方は屈手の軍人

豪傑物語

であります。が新院の方は戦争を知らない公卿ばかりです。から  
 爲義父子を強てお招きになりました。そこで爲義は諸子連れ  
 て新院のお味方に参りました。やがて新院は爲朝を御覽に成り  
 ます。とまだ年齢は二十に足りませんが身の丈は七尺を越え眼  
 は鷹の如く聳は虎に似て万夫不當の剛の者と見えまいた。から  
 大に頼もしく思召し戦争の仕方などを種々御尋に成りました。  
 爲朝長つて臣が九州に居りました時分合戦をして勝ちました  
 は皆夜戦でございます。今度の御戦にもまづ近衛院の御所へ今  
 夜の中に火を仕掛けその勢に乗つて攻め込めは必定勝利で御  
 坐ります。と言上しました。するとお側に控へて居た頼長はこれ  
 を打消し「イヤ、それは下人共のする事だ。苟且にも一天万乗  
 の主君が遊ばす御軍なれば堂々たる戦ひをしなければ成らぬ

豪傑物語

夜討なすは卑怯な事だ矢張り明日の夜明を待つて尋常に勝負をするが好いと言ひましたそこで爲朝の言上した策はお用ひに成りませんかその儘御所を下りましたが後で家來に向ひあふ頼長の長袖姫戦の事などは少しも知らぬ癖に小瀬な事をいふそんな者が付いて居ては此度の戦は新院方の敗北である」と嘆息をして居りましたすると果して夜の明けぬ中から敵の大將平清盛源頼政源義朝の面々各々手勢を引具しく殿しく攻め寄せました此の時爲朝は僅か二十八人を率ひて南の門を固めて居りましたが見ると平清盛の兵がエイ／＼此方へ向つて來ましたからふのれ平家の弱虫輩一つ肝を潰させて呉れんと例の大矢を番へ敵陣へ射込みますと矢はビュ／＼と鳴つて宙を切り眞先に進んで來た伊藤六の満故を見事に射抜いてその後には

豪傑物語

立つて居た弟の伊藤五の鎧の袖に突立つた伊藤五は吃驚して直ぐにその矢をば清盛の處へ持つて行つて見せますと太い三年竹の先へ大鑿の様な矢根が付いてまるで槍かと思はれる位な恐ろしい矢でございますから清盛も戦慄あがつて「これは危険いぞこゝ計りが敵ではないもそつと弱い方へ向はうと卑怯にも引返して他の門へ向つて行きましたすると義朝はこの事を聞き清盛に入れ代つて爲朝の陣へ向つて來ました義朝は大音聲に「その方は弟の八郎ではないか兄に向つて弓を弾くとは身の程知らぬ不屈者奴速かに兜を脱いで降参しろ」と呼つた爲朝これを開き「兄に向つて弓を弾くこの爲朝が不屈なら父に向つて弓を弾くその義朝は大不孝だアツハ、ハ」と笑つた義朝は反對に遣り込められて一言もなく暫らく黙つて居りますと

豪傑物語

爲朝はそれを見てこりやよい的一矢に射抜て呉れんと矢を  
つがひましたたが又思ひ返してイヤ〜縦令ひ今は敵同士でも  
矢張り現在の兄である兄をこの矢で仕留るのは如何にも心に  
濟まないヨ〜只だ乃公の弓勢だけを見せて威して置うと  
やがて弓を満月の如くに引絞りわざと義朝の頭の上の兜の尖  
を狙つて放ちますとろの矢は忽ち義朝の兜の星を射刺つてそ  
の後の門の扉の板へアスと突貫いて立ちましたから流石の義  
朝も此の勢に肝を潰し自分は引退つて兵卒のみを進めました  
が爲朝の矢面に立つて驚るゝもの敷知れませんが敵は  
大勢ですから新手を入れ替へ〜攻め寄せますその中敵より  
御所へ火をかけましたから味方は大に騒動して竟に防ぎ切れ  
ず新院は頼長を連れて御所を落ちたまふところを敵兵の爲め

豪傑物語

に生捕られ頼長は流れ矢に中つて死にました爲朝は親や兄弟  
と共にまづ江州へ落ち延びました

第二席

さて爲朝は父爲義に今一度旗を揚げて平家を滅したまへと勸  
めましたが爲義はその言を用ひませんで降参に出ましたから  
後ち首を討落されました爲朝は一人父に別れて東國の方へ赴  
きましたところ生憎その途中で戦の時に受けた創が甚しくな  
りましたから暫らく近所の温泉へ遁入つて養生をして居りま  
す處を敵の者に見付られて遂う生捕られ都をさして送られま  
したそこで既に死刑に處せらるゝところでありましたが弓矢  
を執つては日本國中敵する者なく實に稀代の豪傑であります  
から只殺すのも惜しいと云ふので命斗りは助けられ其代りに

豪傑物語

此の後再び弓の弾けない様にと両方の腕の筋を切られて伊豆の大島へ流されましたそこで爲朝は両手を嚴重に縛られて大なる輿の中へ入れられ輿丁二十人と警固の武士五十人とに送られて東海道を伊豆の國へと送られました但其途中も爲朝は時々申職半分に輿の中でウンと力を入れますと其度に輿丁共はヒヨロ／＼と打倒れて急に起き上る事も出来ない位ですから警固の武士も舌を巻いてこの勢ひで亂暴された日にはとても敵ふ物ではない怒らせては大變だど虎か熊でも扱ふやうに氣を揉んで稍う伊豆の國へ來ましたから其處より船に乗せて大島へ送り込みました元より豪傑の爲朝でありますから島人もこれを崇め尊んで竟にその恩威に服するやうに成りましたそこで爲朝は大島は勿論三宅島八丈島父島母島などい

豪傑物語

ふ此の邊の島々を恐らす己が領分といたして勢威を振ひましたすると又此事が朝廷へ聞えましたからそれは容易ならぬ事だと直ぐ伊豆の國の狩野之介茂光といふ者に大勢の兵を付けて爲朝を征伐させました此の時爲朝は海邊の岸上に立つて遙かの沖を見渡しますと五十艘斗りの軍艦が何れも帆を十分に張つて攻太鼓を鳴しながら勢好く押し寄せて來る様子です爲朝莞爾笑つて「コリヤ久し振で腕が試める面白い」と云ひながら弓を取つて滿月の如くに弾を絞る先に進んで來る敵船の舳へ一本矢を漂と射込みますと何かは以て耐るべき矢の穴より水が返入り見る／＼中に船は轉覆りアレヨ／＼といふ間に大勢の兵士を乗せたまゝ波の底へ沈んで仕舞ひました爲朝はこれを見て腕の筋を切られてから力は少し弱つたが其代

豪傑物語

此の後再び弓の弾けない様にと両方の腕の筋を切られて伊豆の大島へ流されましたそこで爲朝は両手を嚴重に縛られて大なる輿の中へ入れられ輿丁二十人と警固の武士五十人とに送られて東海道を伊豆の國へと送られました但其途中も爲朝は時々申儀半分に輿の中でウソと力を入れますと其度に輿丁共はヒヨロ／＼と打倒れて急に起き上る事も出来ない位ですから警固の武士も舌を巻いてこの勢ひで亂暴された日にはとても敵ふ物ではない怒らせては大變だど虎か熊でも扱ふやうに氣を擧いで稍う伊豆の國へ來ましたから其處より船に乗せて大島へ送り込みました元より豪傑の爲朝でありますから島人もこれを崇め尊んで竟にその恩威に服するやうに成りましたそこで爲朝は大島は勿論三宅島八丈島父島母島などとい

豪傑物語

ふ此の邊の島々を飛らす己が領分といたして勢威を振ひましたすると又此事が朝廷へ聞えましたからそこは容易ならぬ事だと直ぐ伊豆の國の狩野之介茂光といふ者に大勢の兵を付けて爲朝を征伐させました此の時爲朝は海邊の岸上に立つて遙かの沖を見渡しますと五十艘斗りの軍艦が何れも帆を十分に張つて攻太鼓を鳴しながら勢好く押し寄せて來る様子です爲朝莞爾笑つて「コリヤ久し振で腕が試めせる面白い哩い」と云ひながら弓を取つて満月の如くに弾き続けり眞先に進んで來る敵船の舳へ一本矢を漂と射込みますと何かは以て耐るべき矢の穴より水が還入り見る／＼中に船は轉覆りアレヨ／＼といふ間に大勢の兵士を乗せたまゝ波の底へ沈んで仕舞ひました爲朝はこれを見て腕の筋を切られてから力は少し弱つたが其代

豪傑物語

り腕が少し伸びたゆゑ矢柄は却つて多く彈ける心地よいと手を取つて喜んだけれども爲朝は此處で戦をした處で却つてこの島に居る者に難儀を掛るばかりで差したる功名にも成らず殊には保元の戦に殺さるべき處を宥されそれより十年餘り今日まで生き延びてこの島主に成つたことゆゑ縦令今死するとも命は少しも惜みからずと點頭いて直に館に引返し敵の攻め寄せぬ中に腹掻割いて死にましたけれども島人はその威徳を慕ひ八郎大神といふ神に祀りました或る説には爲朝は琉球に入り浦添按司今日の縣令のやうな官に任せられ子舜天を生みました然るところ琉球に利勇といふ奸臣があつて國王を弑し王位を奪ひました舜天時に年十五でありましたが義兵を擧げて利勇を攻め滅ぼし國內を平定いたしましたから國人に推

し戴かれて國王の位に即たといふことでございます

○豊臣秀吉

(大徳寺焼香)

第一席

豪傑物語

豊臣太閤秀吉は幼時日吉丸と申し農民彌助の子でございませう一説には筑阿彌の子だともいひますその母日輪が懐に入つた夢をみて秀吉を生みましたから日吉丸と名をつけました父は通常の人にするも本意なく思ひ光明寺といふ寺に入れて僧となつたといひましたこの時日吉丸は僅か八歳でおさいいましてが僧となるのを嫌ひ僧は乞巧な男兒亂世に生れて何で僧なぞに成るものかと村内の兒童を集め戦争の具似をして自ら大將と成り衆徒を指揮いたしました活潑と申せば活潑マア亂



豪傑物語

暴な方でありましたそれゆゑ僧は持て餘しその家に歸さうと  
 いたししました日吉丸この寺を追ひ出されたら父が立腹するだ  
 らうと思ひ俺を追ひ出すと手前達を斬り殺してこの寺を焚き  
 拂ふぞと大聲に呼はつて威かしたそこで僧は大に恐れ事に  
 つけて衣服などを與へ休よくその家に歸りました日吉は寺  
 から歸りましたたがその父は貧乏でこれを養ふことが出来ませ  
 んから方々へ奉公に出しましたたが豪放な舉動ばかりいたしま  
 すから何方へ往つても追ひ出され幸に追ひ出されなければ自  
 身の方から懸け出して竟に所定めず漂泊歩きました當時は亂  
 世の事とて何處も強盜糾奪を業とする野武士が多くありまし  
 たが尾州海東郡に住しその近傍を横行する蜂須賀小六正勝と  
 いふ野武士の巨魁がありましてある夜手下の者を率ひて參州

豪傑物語

岡崎の橋を通りましたたが日吉はこの折鉢を纏つて橋の上に熟  
 睡いたし居りましたゆゑ小六は誤つてその足を踏だすと口  
 吉は蕪を排ねのけ勃然と起き上つてその槍を緊と握り日手  
 前は何者だ人の寐て居る邪魔をしてるの儘で濟むと思ふかッ  
 ア頭を地へ擦付けて詭ろ左もなければ目に物見せて呉れるぞ  
 と大喝した小六は大に驚き小イヤ實に大膽不敵な小僧だな  
 何うだ俺れの手下に成る氣はないか日全体手前は何者だ  
 小俺れは斬取強盜を以てこの邊に名を知られた蜂須賀小六正  
 勝だ日蜂だか蠅だか知らないがその仲間に入つて遣らう  
 小何處まで圖太い奴ぢや兎に角俺の手下に仕て通る日手下  
 に成て遣らう何方が頭領だか手下だか譯か分らないさて小六  
 は日吉を手下にいたしましたたが如何にも機敏をさいますから

豪傑物語

尙ほその才を試さうと思ひ、小「何うだ巳が所蔵する村正の刀を盗み取つたなら手前に遣はさう。日よし屹度取て見せよう。」と日吉は請合つて立去りました。小六は村正の刀を坐右に置き、日吉が忍び来るのを今かくと氣を付けて晝夜眠らざること三晝夜に及びました。日吉は小六の神心倦み疲れてコクリ、居座をする處を窺つて遂うその刀を奪ひ取りました。小六は不圖目を醒すとコハ如何に刀は巳に奪ひ取られて仕舞ひました。から小六は益すその智計に感入つたといひます。その後日吉は今川家の士松下嘉兵衛之綱の家僕となりました。この之綱は今川家武術の師範役でありました。するとその門弟に永島今市といふ者がありましたが日吉が毎日道場を覗きます。すから之れを叱り「青二才奴何故道場を覗くのだ。門前の小僧習はぬ經を讀

豪傑物語

むといふ。汝も師匠の家の下郎だ。少しは武術の嗜みがあるらう。我と一太刀試合へ」と詰寄せました。日吉は再三辭退いたしました。が今市が聽入れません。から止むことを得ず、これと試合しました。すると一進一退皆よく法に適ひました。から今市は案に相違して遂う日吉の爲めに太刀を打落されました。から一坐驚嘆いたしました。日吉はその後名を藤吉と改めました。弘治三年の春北條氏政、今川義元と駿州富士川に於て戦ひました。藤吉の主人松平下之綱もこの時従軍いたしました。から藤吉も頻りに手勢に加はりたいと申し出ました。が許しません。から藤吉は密に戰場に往つて見物して居ました。が勇氣勃々として耐えられませんでした。此處彼處と走り廻り、天晴功名をなして呉れんとその機を窺つて居ます。忽ち敵の將校と見え堤の上に馬を立て、水中の軍を

豪傑物語

指揮して居ました藤吉斯くと見て好き敵を参なれど潜と窺ひ  
 寄り槍を延ばして馬の脇腹をゾブリ刺したから馬は嘶いて躍  
 り上り主は「ウ」と馬より落ちた藤吉透さすつけ入つてこれ  
 打ちその首を取つて之綱に見せました之綱その首を握ります  
 ど「コハ如何に北條方の名將伊藤日向守でありましたこの日向  
 守の姪伊藤彌作といふ者日向守の討たれたのを聞き口惜しく  
 己れ叔父の敵討たんで置くものぞと馬上健槍を揮つて義元の  
 本陣を目覓け獅子奮迅の勢ひにて突いて來ました之綱斯くと  
 見てこれと波り合ひましたが彌作は健槍を上げて之綱の鎧の  
 袖に引懸けて馬より引招り落さうとしましたから之綱は殆ん  
 ど危く見えました藤吉はこれを見て走り往き矢庭にその槍を  
 スバリ切落しましたから彌作は眞逆さまに馬より落ち遂う之

豪傑物語

綱の爲めに首を斬られましたこれ即ち藤吉が初陣の功名でさ  
 ざいますさて藤吉は之綱の命にて尾張に往つて胴丸の甲冑を  
 求めて來いと金子を渡されたところその金子を着服して衣服  
 大小を調へたと太閤記にありますがこれは大いなる誤りださ  
 うですいかにかその面が猿のやうだからと言つて手も亦猿に似  
 て長いとは怪しからん話ですその等顔も猿のやうではなか  
 つたのです夫れは扱て置き藤吉は尙ほ好き主人を求めて仕へ  
 やうと彼れか是れかと擇んで居ましたところ織田信長は當時  
 の豪傑でゆく／＼は天下を掌に握る人物と思ひましたから之  
 綱の家を辭して清洲へ往きました

第二席

永祿の元年九月信長は小牧山に狩を催ふされした藤吉は時節

豪傑物語

到來したと大に喜びその歸りを待ち路傍に拜伏して謁見を願ひましたすると信長の重臣柴田勝家がこれを見て「彼奴問者に違ひない纏つて仕舞へ」と足輕共に下知いたしましたから供の者一同「ヤ、ヤ、」騒ぎ立つた藤吉平氣で「よし拙者が敵國の間者にもせよ僅か一人である何も左う騒ぎ立てるにも及ぶまい分別のないにも程がある片腹痛い舉動だワツハ、ハ、」と笑ひました信長遙かにその言を聞き一理あると思ひましたから藤吉を召してその願意を尋ねられますと藤吉謹んで「君今日の御狩にて千万の戰を獲たまふより人一人を得らるゝが勝でござる某上は天文を悟り下地理に通ト兵法の事は一も知らざることなし試みに召抱へてその才能を試したまへ」と臆面なく述べ立てました信長もその大言に驚き足輕藤井又右衛門に預けて實

豪傑物語

否を糺させましたすると藤吉は本音を吐き實は私は先殿様に御奉公いたしました足輕中村彌助の子藤吉郎と申す者で先刻言つた天文地理の事なうは一向辨へません只だ尋常手段ではお召抱に成るまいと存ト僞りを申し上げましたといひますから藤井は斯くと信長に言上いたしました長信これを聴き言語同断れかしな奴だなとあつてうの儘留め置きて馬飼といたこれました藤吉は是れより晝夜間断なくうの職を盡しましたから信長もその忠實の愛し小猿ノと召されましたこれは何も面が猿に背て居るから左う云はれたのではありません小猿のやうに小伶俐に立廻りますからでございますそこで藤吉を草履職に擧げたところが益するの職を屬みませすから信長もその忠誠に感し台所奉行といたしましたするとその費用が大尉

滅じましたこれより藤吉は信長に言上して自ら清洲の城を修  
葺し或は奇計を以て敵を破り度々拔群の功を顯はしましたか  
ら遂に一方の大將に任せられましたして姓名を羽柴秀吉と改め  
ました

第三席

さて秀吉は信長の命に依り中國征伐として西國に進發いたし  
毛利氏と對陣して居ります中信長は明智光秀の爲めに本能寺  
にて弑せられましたから秀吉は急ぎ飯つて吊戦を起し山崎の  
一戦に光秀を誅して亡父信長の葬儀を紫野大徳寺に營みまし  
た然るに柴田勝家、瀧川一益、佐久間盛政の面々秀吉の功を嫉み  
窃かに秀吉を亡はんと計りました秀吉は使者を諸方に遣はし  
て信長の葬儀を知らせましたところ柴田勝家斯くと聞きこも

豪傑物語

豪傑物語

や時節が來たこの時に乘じ秀信と信雄とに焼香の順を争そは  
せて秀吉の勢を挫き多くの大名に我が威勢を見せて呉れんと  
その一味の佐久間前田不破佐々の輩を連れて上洛いたしましたし  
た瀧川一益もまた己が武威を示さんと思つて來會いたしその  
外織田家新古の家臣より毛利浮田二家の名代並に諸國の武將  
に至るまで皆會葬の爲め京都に集りましたやがて葬儀の準備  
も整ひましたゆゑ十月十五日己の上刻より諸將いづれも參會  
いたしましたのが式終つて棺前に焼香するとき前田徳善院玄以  
法印殿かに焼香の順を讀みにかゝりましたすると柴田勝家大  
將聲に「亡君の吊合戦に勳功あつた侍從信孝郷早速焼香あれ柴  
田勝家付添へ奉らんと呼はり信孝を伴つて出やうといはしや  
した」と北畠の家臣星崎長門之守大音に呼びかけて「イヤ信

豪 傑 物 語

孝卿暫く御扣へあれ中將信孝卿は信長卿の二男に在せば信雄  
 卿が先きへ焼香あれといふと瀧川一益が進み出で兩公遠御一  
 處に焼香のれと仲裁いたしましたから兩卿等しく進んで御位  
 牌を拜し己に香盒に手を懸けやうとする一刹那幕の内に聲あ  
 りて兩卿暫らく待たれよ羽柴四位少將秀吉見参いたさんと呼  
 はつた人々その大聲に驚いてこれを見れば秀吉冠に黒き闕腋  
 の袍を着し秀信卿を抱いて徐々と立出でましたその側には加  
 藤清正同孫市福島市松片桐助作などいふ万夫不當の勇士が十  
 六人付き従つて居まして若し狼藉に及ぶ者あらば捨り殺さん  
 といふ構幕でございます秀吉はヨロリ四方を見廻し不孝の信  
 雄信孝不忠の勝家一益嗣君秀信卿の焼香濟まざるに尾籠の  
 動である扣へ居れと叱り付けたが人々一言も發する者があ

豪 傑 物 語

りません勝家進へ切れずして之れを咎められたが秀吉滔々ど  
 その理否を辨し遂に秀信が焼香し續いて秀吉が焼香すること  
 になり夫れより官位勳功に因り順を亂さず嚴に焼香を濟ませ  
 ました秀吉の威光が天下に輝いたのは全くこの事からである  
 と言ひ傳へますけれどもこれは虚談にて信雄兄弟柴田佐久間  
 などの會葬したことはないさうですが今日まで世人に持離  
 れた事柄ですから一寸述べて置きました  
 秀吉は賤き身分より起つて天下を掌に握りましたがその間は  
 常に戦争に従事いたしましたから風流なことは解るまいと思  
 はれますが中々風流で茶事を好みまた折々和歌を咏むことが  
 ありましたある日紹巴に向ひ俺が幾句をするから汝は脇句を  
 せいといひまして奥山にもみぢふみわけ鳴盛とされましたす

ると紹巴が「しかども見へぬ燈火の影」と吟じて 紹巴は鳴く蟲  
ではござりませぬ 秀「イヤ聲がなくとも己が聞かして遣らう  
と云つたするとその時細川幽齋が傍に居て「武藏野やしのを東  
ねてふる雨に、はたるより外鳴蟲もな」と咏まれたから秀吉は  
大に悦びました秀吉の歌に「三つの國一つに、ぎる富士の山」と  
ありますがその思想の大いなるのが思ひ遣られます

### ○山田長政

(普肉の航海)

山田長政は駿河の人でありまして幼名を政藏と申しました性  
來才智非凡で腕力も人に勝れ常に村内の小兒達を集めて餓鬼  
大將となり少しでも自分の意に従はない者があると撲り倒し  
なさいたしますので先方の親達より苦情を申し込まれますか

### 豪傑物語

ら長政の両親はほとく持てあまし後日人でも害める事があ  
つては成らぬから率そ坊主にしたが宜からうと相談いたしま  
した長政は斯と聞き坊主になどされて堪るものかと大膽にも  
我家を出奔いたし紺屋某といふ家へ尋ね行き數年此家の厄介  
と成つてその中に劍道を修行してその奥義を極め夫れより數  
年國々を経廻り何か大業をなして名を顯はし家を興さんもの  
と思ひましたのが當時弓は藝に治まる太平の世にて功名手柄を  
あらはす機会がございませぬから嘆息して「男兒戰國の世に生  
れなければ大功業は成せんこの儘草木と同じく朽るはいかに  
も遺憾だも、我國斗り日は照さんヨシ海外に渡つて我が志を  
果さうと決心いたしました當時外國渡航禁制以前でありまし  
て駿府に灘佐右衛門大田治右衛門といふ貿易商人があつて元

豪傑物語

和年間臺灣に渡航して貿易をいたさうと大坂の川口に船を繋ぎ荷物を積込み頻りにその用意をして居ました長政は斯と聞き機失ふべからずと兩人に面會して長承はれば御兩人には此度外國へ貿易に渡られるとか全く左様でござるか 瀧へい臺灣へ渡る都盛です 長左らば拙者を一所に連れては下さるまいか 瀧と冗談を…… 長イヤ決して冗談ではせざらぬ 主「お武家方が臺灣へお渡りに成つたつて仕方がありません 長「所が仕方があるゆゑ渡りたいので…… 瀧何か交易の品でもお持ちなのでございませうか 長別に交易の品物はないこの両刀とこの腕がある斗りで……」と腕を捲つて節くれ立つた腕を叩いた二人は益す駭れと思ひ 瀧臺灣には鬼が居るさうですから鬼退治にでもお出なされるのですか」と笑ひながら問ふと長

豪傑物語

政は眞面目で 長「ナニ鬼が居るとろれこそ望むところ退治して呉ん 太私共は商人で臆病者ですから鬼退治のれ供は眞平御免を蒙ります 長イヤ鬼退治の供をしるとは申さん只だ拙者を台湾まで同船させて呉れさいすれば宜いので…… 瀧貴郎をお連れ申すは譯けはございませんが若しそれが鬼にでも知れると何んなに怨まれるか知れません鬼に怨まれると交易の邪魔をされますから此儀はお断り申しませう 長何うあつても同船を聞き入れんとな二人へ御免を蒙ります 長それなら強て頼まん此方にも量見があるから」と勃然として立去りました二人は跡で顔見合せ 瀧「キ印に違ひないアハッ、ハ、太飛んだ者が舞ひ込んで來た然し量見があると云つて怒て歸つたから何をするか危険だ 瀧「ナニ尻に帆かけて台湾へ走



豪傑物語

つて仕舞ふから掃やしない」と話し合つて居ましたさて長政は二人より先きに大坂へ参りその船を捜し出して潜かに船底に匿れて居りました二人は左うとは夢にも知らずやがて用意整ひましたからその船へ乗込み順風に真帆かけて出帆いたしました瀧山田奴今頃何うして居るだらう太那んな狂氣を流れて往つたら何をするか知れやしない瀧鬼が居ると云つたら鬼退治をするといふから可笑しいアハハハ太日本中食詰めて外國へ食稼きに往かうと思ふのだらうよと散々罵つて居ますとバツン音がして船底から長政がヌーと顔はれ出ましたから二人は吃驚仰天して呆と云つた斗り開た口が塞がら無かつたそこで長政はまた二人に同船を頼みました二人も乗り掛つた船ではない既に載つて居るのでありますし又元へ船を

豪傑物語

戻す譯けにも往かず陸方なく承知いたし台湾へ載せて往きました二人はやがて商用も済みましたから飯國仕ようと思ひ長政を連れて飯らうとその趣きを長政に告げましたとこる長政は飯國する意がないと申しますから二人は厄介拂ひをしたと喜んで長政を台湾へ置去りよして歸國いたました長政はつら<sup>あ</sup>台湾の有様を見ますに少な島國にて己が大望を成すに足らんと思ひましたから糧船に乗つて暹羅に渡りましたすると丁度この時暹羅の國は大に亂れ四方より敵が攻寄せましたたがその中で六昆が最も強うございますから暹羅王は親ら兵士を帥ひてこれを禦がれました長政はその軍を見物し居ましたたが暹羅の兵は紀律も何もありませんから長那んな不紀律な兵では屹度負ける」と吐つたすると果して敗北しましたとこ

豪傑物語

で或る者が長政の言つた事を國王に言上いたしました國王は早速長政をお召しに成つて種々と戦の仕方をお尋ねに成りました長政は詳しくその策略を申し上げましたところ國王は大喜び給ひ長政を大將軍として六昆を禦がせましたすると長政はその兵士に日本の装をさせ六昆の兵と戦つて大にこれを打破り六昆王を生擒つて歸りましたから國王は大に長政の功を賞したまひその姫君を長政に妻はせて六昆の王といたされました

○市川白猿

(真劍勝負)

市川白猿は有名な俳優でございますが常に弟子達の藝道未熟なのを罵り懲して「コレ團八見物人を泣かせよう」とするには自

豪傑物語

分が泣いてかゝらなければ成らんか前のは目に唾をつけて泣いた振をすると同じた何で悲しいことがあるものか猿三も左うだ那んな立廻りて人が殺せるものか全体芝居を芝居だと思ふから不可ん人殺をする役なら眞實に人を殺すといふ意氣組がなければ木偶が動いて居るも同様だ以來氣を付ると叱りましたけれども良薬口に苦く諫言耳に逆ふの誠の通り度々口汚く叱り付けられますので弟子共は反て白猿を恨み 甲「師匠のやうに那小言ばかり言はれやあ堪らない何うだい一ツ意趣返しを仕ようぢやないか」乙「左うさ那ガミ」怒鳴つけられちやあ實に癪に障るよ 丙「意趣返しつて何うするのだ 甲」人を殺すなら眞實に殺す意氣組があければ不可ないと云つたらう」丙「成程左う言つたことがある……」甲「そこで今度立廻の

豪傑物語

狂言の時異物の刃物を以て立合ひ透きを見て殺して仕舞ふか  
やあないか」乙「これやア面白い遣つ付やう」と忽ち賛成して  
の手筈を定めました神ならぬ身の白猿は斯る巧みのあるとは  
解知らざるある日舞臺に上り弟子達を相手に烈しい立廻りの狂  
言をいたしましたすると「如何に弟子達の氣合が例に違ひ  
宛で真物でありますから白猿一生懸命に相成り右に受け流し  
左に引外し電光石火燈々々丁々發矢と切り結びました弟子  
達は固より真に切り込むのですが打ては受け突けば拂ひ少し  
も隙がありませんから遠う幕切れまで殺すことが出来ません  
でしたやがてその日の演劇も打出しとなりましたから弟子達  
は額を焼めて 甲「イヤ驚いたな那の勢ひぢやあ逆も殺すこと  
は出来な」乙「少しも打つ隙がないもの反對に殺されて仕舞

豪傑物語

ふよ」丙「ナ」師匠は真劍勝負と知つたから「何うも飛んだ  
事をした」丁「那の梅隠ぢやあ然うかも知れない固つた事に成  
つた何う仕よう」乙「成程師匠が此方の器を覺つたのだらう  
夫れなら大變だ斯うしては居られない」甲「それぢやあ今に召  
び付けられるだらう逃げるより仕方がない」と眞背に成つて  
心配して居ますと果して白猿は弟子達を俺が部屋に召寄せま  
した弟子達は今更逃げるにも逃げられず詮方なく恐るゝ白  
猿の前に送り出で平蜘蛛の如く低頭平身いたしましたすると  
白猿は例の如く眼に電光をさせて大喝するかと思ひの外莞爾  
として 自「イヤ今日は實に感心した眞實に人を殺す氣合が  
見えた」同「へ、へ、何うか御勘辨成すつて……」自「ナ」勘辨  
こでない稱めて遣る」といひますから弟子達は冷汗を流し一同

「恐れ入りました何うも穴へでも這入たうございす」自何  
左う恐れ入るに及ばない今日に限つて大尉謙遜して穴へ這入  
たいなぞといふが一体何うしたのだと問ひましたから弟子達  
は顔見合せ心の中でこりや師匠は此方の巧みを知らないなど  
思ひましたがいかに自の技倆が優れたのに感服いたし言  
ひ合しませんでしたけれどもその中の一人が膝を造め實は斯様で  
ございます私共武道未熟ゆゑ度々師匠に叱られますのを残念に  
思ひ立延の時良劍を以て師匠を殺さうとしたのでございす  
と自狀して一同首を疊へ擦り付け謝罪いたしました自猿これ  
を聞いて願を撫で「アツハ、ハ、左うか何うれで真に迫つたと  
思つたマア是れから那の氣合で遣んなさい」と云つて少しも尤  
めず 自今日の立廻りは至極氣に入つたからお前達に蕎麥を

振舞ふと快然として共に飲食したといひますがナント大阪中  
ではございませんか

○楠正行

(櫻井の驛)

元弘の四年足利尊氏直義西國より雲霞の如き大軍を率ひて都  
へ改め上りました時に楠正成は参内して防禦の策を奏上いた  
しました坊門宰相清忠に妨げられてその策は採採用ひにな  
りませぬゆゑ正成は早や是れまでなりと覺悟して出陣してい  
たし櫻井の驛に到り子息正行を千早の城より召び寄せまして  
正成今汝を招いたは外でもない汝に一言遺し置かん爲めであ  
る彼の獅子といふ猛き獸に子を産んで三日経つと千丈の絶壁  
からこれを抛り投げてその子の力を試すといふ況して汝は最

豪傑物語

う十歳の上にも成ればよく父が教へることを承はれよ今度の合戦天下の安危と思へば今生にて汝の顔見ることとは是れ限りである正成が已に討死したと聞えたら天下は足利の有となるは必定されども汝は一旦の命を助からうと思ひ父が一生の忠義を無にして敵に降参し家名を汚しては成らぬ一族郎黨の中で一人でも生残る者あらば金剛山の城に籠籠り敵何百万騎寄来るとも身命を抛て朝廷の御爲に忠義を盡せよこれ汝が第一の孝行であるぞと懇ろに諭し豫ねて書置いたる治國の道數十ヶ條法令一卷を取出して正行の手に渡しました正行は父が遺言を聞いて堪へ兼ね正行見は父上に別れて舊里へは歸りませぬ是非軍の御供いたしますと聴き入れませんから正成は聲を勵まし正成わが汝を後へ止め置くのは汝を不慮と思ふので

豪傑物語

はない天下の御爲めに止め置くのである左様な女々しき心慮にては君の御爲よ力を盡すことも出来ず竟には不義の心も起るであらう不埒者奴と叱りましたから正行すその理を悟り正行それでは仰に従ひ忠義を勵みますと答へましたから正成は大に悦び正成この刀は主上より賜りたるものにて我常に肌身離さず所持したれど今これを汝に遣はすゆゑ父の事を思ひ出す折にはこの刀を見るが宜いと正行に渡して八尾和恩地の人々に向ひ何れも正行に具して千早に歸り我に代つて忠義を勵み時至らば君を御代に付け奉れと諭し今は心安しとツト立上り正行の手を取て先刻もいふ通りよく郎黨を扶助して疎するなこれ肝要の一言だぞよ又よく學問を精出して行狀を正しくせよ弟共も腹ぞ待つて居らう去らばと正行をせき立

てロフマに打捨りまゝ正行はハラ／＼と落る涙を抵ひ父  
の面影振返り／＼思地和田等の船黨に扶けられて泣く／＼千  
早城へ歸りました

第二席

正行は和田思地など宗徒の人々と遺言によつて河内の千早城  
に歸り義を金鉄の堅さに比らへ朝家の再興を計らんと心懸け  
て居りましたすると正成に隨つて兵庫へ趣きました竹童丸と  
いふ少年が湊川の取場より敵中をしのぎ千早の城に馳せ歸り  
ましたから後室正行を首め城中の諸士争つて湊川合戦の様子  
を尋ねました竹童丸は一息つきて會釋いたし竹味方は小  
勢なれども不意に直義の本陣に押寄せて粉微塵に切崩し六將  
直義を擒にせんと退ひ捲る折から海手の敵勢經ヶ島を防がれ

豪傑物語

豪傑物語

て神戸の濱より上陸なさんと船を打へ滑寄せるを和田の岬に  
扣へたる新田勢備を神戸へ繰り出して上陸さすなど擧つて船  
を退ひかけ東を指して馳せ向ひしゆゑ吾殿の御陣は次第にそ  
の間隔たつて兵庫の島には支へる勢一人もな！直義早くもこ  
れを見て兵庫には敵の備へなきぞ此の間人数を揚立せよと  
九州中國の兵船六十餘艘和田の御崎に漕寄せて一時に陸へ馳  
せ上つたり殿には夫と御覽じて御連技帶刀殿に向ひ給ひ彼れ  
見られよ敵に前後を遮ぎられ味方は陣を隔つれば今は退れぬ  
所なりいざ前なる直義の勢を一戦に追まくりそれより後の敵  
に向ひ尊氏を相手に戦はんと仰せられ帶刀殿と雲霞の如くに  
簇つたる敵の大勢を真一文宇に駈入たり直義夫れと見て楠な  
るぞ油断して計られぬ亂れ矢にて討取れと取圍ひ我殿には帶

豪傑物語

刀殿と左右に別れ七々び合ひ七々びわかれ直義探取れと駈た  
まへば直義の兵二十万騎わが七百餘騎に駈備まされ急軍こそ  
つて崩れ立つ志貴右衛門馬を跳らし鉄棒打振つて直義を何國  
までもと追廻すを仁木の一族これを支ぎり止めたり帶刀殿遊  
かにこれを見給ひ横合より仁木の後廻り一文字に駈來り直  
義を狙つひやうと射たるに其箭はづれて馬に當り馬はね上  
り直義は下に墮と落るを帶刀殿得たりと馳寄つて既に懸んと  
し給ふどころへ藥師寺次郎左衛門馳來つて帶刀殿に懸てか  
る其隙に直義は辛き命助かり上野をさして逃ぎ延びたり帶刀  
殿齒がみをなされ藥師寺が郎黨を切倒しく湊川へ引返さる  
舟氏船の中より直義が動靜を見て大に苛ち采配取つて下知す  
れば高細川仁木石堂吉良上杉の六將承ると其勢二万餘騎にて

豪傑物語

湊川の東に進み跡を切らんと取國む吾殿それと御覽トて御馬  
の鼻を直し帶刀殿と餘の敵には目もかけず直義が本陣へ突入  
り雲霞の如き大軍を東西に追詰めて懸崩し親討るゝも其屍を  
乗越へ必死と成つて戦へば敵の死傷は夥しく足利勢魂を飛ば  
し足の踏むところを辨へず粉の如くに切散され墮と崩れて敗  
走すこの合戦辰の上刻より申の下刻に至るまで二十餘段戦ふ  
毎に大軍を蹴破りしが身鉄石にあらざれば残るは僅か七十三  
騎各痛手を負へば今は是迄なりと敵を追はず湊川の在家廣殿  
寺へ引取給ひ御鎧を脱ぎ給へば御身の疵は十一ヶ所あり此時  
足利勢廣殿寺を十重二十重に取圍みて蟻の出べき所もなし殿  
には此竹壹を御側近く召寄せられ其方は薄手を負ひしなれば  
河内に歸り合戦の形勢を略れと仰せ付られしゆゑこれは餘人

豪傑物語

第三席

に命じ給へど辭退いたせし所即入なく以ての外の御氣色ゆる是非なく是れまで罷り歸り候大殿には既に御一族帯刀殿と俱に御最期を遂げ給ひしと覺え候今は竹童が御用も仕どげたり間もなく追若奉らん」と短劍抜放ちアツヤ自殺いたさうと仕ますから人々述て、竹童の手を執へ「若殿御幼少に渡らせ給へば其御大事に會ふて高名爲さば大殿の御供にも勝るべし」と固く止めましたから竹童詮方なく人々の意に従ひましたがその夜人なきを窺ひ細かに遺書を認め自害して果てました生年十八歳わはれ健氣を振舞ひではございませんか

さて千早の城中にては正成討死と聞て主従悲憤の涙に暮れて居りますところへ京都より尊氏の使者が正成正季の首を持参

豪傑物語

て「子息正行殿の心中をお察し申しその記念に御首を送り候ゆゑ懇ろに追善供養せられよ」と述べましたゆゑ和田恩地の二人首級を受取り御情け辱ふ存じます」と禮して使者を還し置した正成の後室は正成が兵庫へ發向の前今度の合戦討死すべき覺悟なりと云はれて正行を留置かれたを今生の別れと思つて居ましたところ今眼前その首級を見れば昔に變り淺ましい有様ゆゑ悲しき胸一ばいに成つて落ち来る涙を訣にて拭いて居ります正行も櫻井の驛にて父に見えし時にも似てその首級の變りたる有様と母が悲み嘆くのを見てハラ／＼と落る涙を袖にておさへツト立て持佛堂に這入りました母は正行の容子が變ですから怪んで窃と妻戸の方に廻つて覗いて見ますと正行は父が櫻井の驛にて形見に遺された菊一文字の短刀を扱



豪 傑 物 語

て右の手に持ち袴の腰を挿さげてアハヤ自害せんとする所で  
すから後室は大に驚き妻戸ツツと開き走り寄つて正行の腕に  
取付きハラ／＼と涙を落し「これ正行の生害は何故ぞ父上の  
御最期と聞て悲嘆のあまり正氣を失ひ心狂ひしか父上が兵庫  
へ向ひたまひし時櫻井の宿にて御教訓ありて返し留め給ひし  
は跡を吊はせん爲ではない形見に賜りし菊水の御劔は腹切て  
犬死せよと残されたのではない此の御劔は辱くも父上が朝敵  
退治の軍功を拔群なりと思召され感激のあまり御手づから賜  
つた御劔であるぞやこれを御身に譲り給ひしは御討死のろの  
後は我に代つて朝廷を守護なし此御劔にて足利を討平げよと  
の御遺訓ではないか櫻井驛の御教訓に今度の合戦天下安危と  
存する間今生にて汝が顔を見るは是れ限り我討死すとも我が

豪 傑 物 語

志を繼ぎ忠を君ふ盡し主上何國に御坐と承らば生残りたる郎  
黨を集め敵寄せ來らば金剛山に引籠り命を養由が矢先に懸け  
義を紀信が忠に比べ朝敵を討滅ぼし君を御代に立せ進せよと  
仰せられたる御遺言を御身歸つて泣く／＼妾に語りしが何の  
程にか忘れしぞ其心底にては父上の御名を汚し君の御用に重  
んこと覺束ない」と罵りし諒してその刃を奪取り言葉を盡して  
意見しました流石才智の正行でございますから實に然うでも  
つたと心付き正行母上容したまへこの正行が一時の迷ひにて  
遂ひ御遺言を忘れました只今の御教訓心に染みました決して  
御心配遊ばすな今にも朝敵を討亡ぼして主上の御心を安んじ  
奉りますと涙ながらに詫言ひましたから後室も涙かくして「  
夫れでこそ正成が子ぢや妾が子ぢや」と賞め賜りましたが

その心の中は如何なでございませう正行は是れより遊び戯れ  
るにも児童を集めて戦争の狀をいたし逃げる者を追蒐けては  
賊兵を追ふといひ首を斬る眞似をしては尊氏の首を討取つた  
といひ只管朝敵を討亡ばす事のみ心懸け盡は劔撃射術を練磨  
し夜は軍學兵書講習して君父の讐を報いんと膽を嘗めて居  
ましたが後年兵を擧げて度々足利勢を撃惱し遂に高師直の大  
軍と戦つて四條驛の露と消えましたが忠臣孝子の美名は未代  
に残りました

豪傑物語終

明治三十一年三月廿八日發行

講演百冊弁六

發行者 市川路周

東京市神田區佐久間町三丁目三十八番地

口演者 谷口政徳

東京市神田區表神保町十番地

印刷者 今成温平

東京市神田區佐久間町三丁目三十八番地

賣捌所 文事堂





